

ASNET の事業

ASNET (Asian Studies Network, 「日本・アジアに関する教育研究ネットワーク」) は、東京大学において、日本・アジアと接点を持つ教育研究に従事している研究者間の研究協力や情報交換を容易にし、新しい教育や研究の可能性を探るために設立されたヴァーチャルなネットワークです。このネットワークの活動に関心を持つ東京大学の教職員が正規の会員ですが、それ以外の学生や一般市民もウェブサイトやメーリングリストの利用を通じて、必要な情報を得、ネットワークの活動に参加することができます。東京大学本部の国際連携本部に置かれた ASNET 推進室がこのネットワークを運営しています。ASNET のウェブサイトのアドレスと推進室の連絡先は以下に記すとおりです。

部局単位では実施しにくいような新しい形の教育や研究協力を試みることが ASNET の目指すところですが、EALAI と共同でのテーマ講義は、まさにその趣旨にふさわしいものといえます。今回は、「グローバル・ヒストリー」をテーマに、文系・理系双方の切り口からテーマ講義を行いました。次年度以後も、このような理系や文理共同のテーマによる講義を試みていきたいと考えています。

ASNET 推進室長 羽田正

ASNET ウェブサイトのアドレス：<http://www.asnet.dir.u-tokyo.ac.jp>

ASNET 推進室：〒113-8654 東京都文京区本郷 7-3-1 (本部棟 9 階)

メール：asnet@asnet.dir.u-tokyo.ac.jp (担当：古澤拓郎)

EALAI とは

リベラルアーツ教育（教養教育）は、幅広くバランスのとれた知の獲得をめざす東京大学の教育の柱となっています。EALAI (East Asia Liberal Arts Initiative) は、リベラルアーツ教育の東アジアへの国際展開を目指す活動を行っています。北京大学、ソウル大学校、ベトナム国家大学ハノイ校と東アジア四大学フォーラムを毎年開催し、東アジアにおける共通教養教育の可能性を追求しています。また、南京大学では表象文化論集中講義をはじめ、リベラルアーツ教育プログラムを実施しています。さらに「教養のためのブックガイド」の中国語、韓国語、ベトナム語版を出版するなどの発信事業を展開しています。

EALAI のもうひとつの大事な事業は、東アジアを含めた世界からの着信です。それが各国の代表的な研究者をお招きし、いま我々にとって重要なテーマについて語っていただく、このテーマ講義です。ASNET との共同で開講された本講義は、人文系と理工系の内外の第一線の研究者をお迎えし、グローバル・ヒストリーの目指す先を語っていただくという刺激的なものとなりました。いま私たちにとって、なにが大事なのか、なにを見つめ、なにを聞き、どう考え、行動すればよいのか。本講義の授業アンケートからは、学生の皆さんが、この知的興奮を、たしかなものとして受け止めてくれていることが伝わってきます。刺激的な講義を組織して下さった水島司先生、木畑洋一先生をはじめ、ご協力いただいた皆様に感謝いたします。

EALAI 執行委員会 刈間文俊

テーマ講義「グローバル・ヒストリーの挑戦」について

歴史教科書問題に象徴されるように、歴史認識とそれを共有化するための歴史教育は、各国民国家のイデオロギー的支柱のひとつとして機能してきた。世界史はといえば、しばしばそれらの国民国家史が集められ整序されたものとして描かれてきた。他方、一国史の寄せ集めとは別のものとして世界史認識とそれと連動した政治運動に大きな影響を与えたマルクス史学とその発展段階論は、現実の政治運動との近接性ゆえに、影響力を失うという皮肉な結果となった。一時おおいに注目を浴びた社会史やポストモダンの歴史学は、歴史の普遍性や方向性を見出さざるを得ないとする人々の支持を得ることができなかった。今、歴史学に関わるものの多くは、特定の空間枠における特定の時間枠の変化、あるいは特定のトピックに集中するいわばマイクロな歴史世界に埋没しているかのようである。

世界史理解をめぐるこのような状況とは対照的に、現実の世界では、地球規模で発生する、あるいは地球規模で連関する様々な動きがめまぐるしく立ち現れてきている。ソ連邦の崩壊が示す冷戦体制の崩壊とアメリカへの軍事一極化はもとより、EU の統合、「東アジアの奇跡」から「アジアの奇跡」へとつながる中国やインドなどの近年の驚異的な経済成長、インターネット革命、ヘッジファンド、イスラーム教やキリスト教、ヒンドゥー教などの原理主義的硬化、世界的なネットワークと連関して生ずる地域紛争やテロ、エイズや SARS の広がり、熱帯林破壊や地球温暖化などの環境問題の深刻化、移民の増大と国境越えをめぐる数々の悲劇、エスニシティ問題の深刻化など、国民国家を超えた動きと国民国家を強化する動きが同時並行して強まった。こうした動きを仮にグローバリゼーション現象と呼ぶうるとすれば、グローバリゼーション現象の中の無数の渦は、それぞれ固有の動因と方向を示しながらも、全体として結びつきながら大きな渦を生み出しているようである。

このような世界史理解の現状と世界の現状を背景として、注目すべき動きとして出てきているのがグローバル・ヒストリーの研究潮流である。現在に連なるグローバリゼーションの動きに歴史家としてどのような方向性を見出し提示しうるのかという問題意識を底流にして、単なる各国史の比較ではなく、国家間、地域間の相互交流と相互インパクト、生産から消費、思想、文化なども枠に組み込んだ統合的な研究が広がりつつある。とりわけ注目されるのはグローバル・ヒストリーにおけるアジア史再認識の動きである。中国やインドの歴史発展の解釈についても、従来の帝国史観や民族史観のいずれからも自由な多極的な関係を重視する歴史解釈も進んでいる。

今回、世界史認識をめぐる新たな状況を見据え、特にアジアを主たる対象としながらグローバル・ヒストリーに関わる学内外の人文社会系の講師を中心に、さらに地球環境問題、農業問題、都市問題などに取り組む本学の工学系や農学系の講師が加わり、様々な切り口のリレー講義を行った。教養課程の学生の、グローバル・ヒストリーの潮流の持つ意味と意義への理解を深めさせることが、本講義の目的である。本講義の実現に尽力下さった講師の方々、TA・RA の諸君、EALAI の石井弓さんを始めとするスタッフの皆さんに深く感謝したい。

2007 年 8 月
水島 司

“The Challenge of Global History”

As symbolized by the “history textbook issue”, the understanding of history and the history education for sharing it has functioned as one of the ideological pillars in any nation-state. Though called as “world” history, its depictions have often been reconstructed as the assemblage of national histories of the respective nation-states. The Marxian perception of historical development, especially that of developmental stages, has exerted a great influence on the understanding of world history and the related political movements by posing world history as something different from a patchwork of single national histories. It is, however, ironical that it lost her influence due mainly to her proximity to actual political situations. The once enthusiastically received social history or postmodern approaches seem to have lost the support of those historians who look for universality of history and the directions it leads. At the moment many in the historical undertakings seem concentrating upon a specific topic in a specific moment at a specific space. “Micro history” could be a proper term to call such trend.

In contrast, the real world is observing a flurry of developments mutually related on a global scale. The breakdown of the cold war system by the collapse of the Soviet Union, the weighing towards unipolar system headed by the United States, the European unification process, the tremendous economic growth of China, India and other Asian countries, the Internet revolution, the hedge funds, the fundamentalist hardening of religions, the regional wars and terrorism, the spread of AIDS and SARS, the exacerbation of environmental problems like global warming, the international migration and tragedies accompanying border crossings, the escalation of ethnicity problems and other developments all transcend the boundaries of nation state. The results have been the simultaneous processes of weakening and restrengthening of the nation-states. If we call such developments as globalization, the vortexes, each with its distinctive cause and direction, are connected with each other and seem to be producing one greater vortex.

Against this background the trend of so-called global history has come to receive wider attention. An increasing number of comprehensive works that have incorporated the inter-state, inter-regional movements in various fields like production, consumption, ideology, or culture have been produced with the intention of searching some path for future in the global age. Particular attention is here paid to the new understanding of Asian history, free from the conventional imperialistic or nationalistic views.

In this series of lectures are presented various approaches to “a global history” or “global histories”, observing Asia as its main object. Lecturers are recruited not only from the humanities and social sciences but also from the fields of the engineering, agricultural science, and urban studies. Some are invited from outside the Campus. I would be happy if our students in the liberal arts course could have a deeper understanding of the significance of global history through their experience in the series.

I thank to the lecturers, teaching assistants, research assistants, and staff members, especially to Yumi ISHII of EALAI and Prof.Yoichi KIBATA, for their valuable contributions towards the realization of this project.

August, 2007

Tsukasa MIZUSHIMA

目次

(日本語・英語・中国語)

第1回：ガイダンス：グローバル・歴史の挑戦	8
水島司 (南アジア史：東京大学)	
第2回：イブラヒムの旅：ロシア・オスマン帝国・日本	10
小松久男 (中央アジア史：東京大学)	
第3回：イスラーム世界の創造と新しい世界史	12
羽田正 (西アジア史：東京大学)	
第4回：貨幣たちが語る世界史：その非対称性・多元性・補完性	14
黒田明伸 (貨幣史：東京大学)	
第5回：What Can History Offer To Global Studies?	16
Kenneth L. Pomerantz (中国史：カリフォルニア大)	
第6回：近世アジア間貿易とイギリス産業革命：銅から見るグローバル・歴史	20
島田竜登 (貿易史：西南学院大学)	
第7回：世界システム論からグローバル・歴史へ	22
山下範久 (歴史社会学：立命館大学)	
第8回：アジア都市は近代都市計画をいかに受け入れたか： インフォーマル都市の生成と再生	24
城所哲夫 (都市論：東京大学)	
第9回：変動するアジアの自然環境：その現在・過去・未来	28
須貝俊彦 (自然環境学：東京大学)	
第10回：生物資源と人類の100年：1950～2050	30
川島博之 (農学：東京大学)	
第11回：湖の堆積物に中国王朝の歴史を読む：地質学者の目	32
松本 良 (地球環境：東京大学)	
第12回：アジア国際秩序とイギリス帝国、ヘゲモニー	34
秋田 茂 (イギリス帝国史：大阪大学)	
第13回：グローバル・歴史と帝国論：リレー講義のまとめを兼ねて	36
木畑洋一 (帝国史：東京大学)	

目次

(韓国 / 朝鮮語・ベトナム語) : 38

한글

Tiếng Việt

:38

Summer Seminar 2007 EALAI / ASENT Lecture Theme “Challenge Of Global History”

1. MIZUSHIMA Tsukasa, History of South Asia, The University of Tokyo	8
“Challenge of Global History”	
2. KOMATSU Hisao, History of Central Asia, The University of Tokyo	10
“Travels of Abdurrehid Ibrahim - Russia, the Ottoman Empire and Japan”	
3. HANEDA Masashi, History of West Asia, The University of Tokyo	12
“Creation of ‘ the Islamic World’ and New World History”	
4. KURODA Akinobu, History of Currency, The University of Tokyo	14
“World History Reflected in Currencies”	
5. Kenneth L. POMERANTZ, Chinese History, University of California, Irvine	16
“What Can History Offer to Global Studies?”	
6. SHIMADA Ryuto, History of Trade, Seinan Gakuin University	20
“Early Modern Intra-Asian Trade and the British Industrial Revolution”	
7. YAMASHITA Norihisa, Historical Sociology, Ritsumeikan University	22
“From World-System Analysis to Global History”	
8. KIDOKORO Tetsuo, Urban Studies, The University of Tokyo	24
“How Did Asian Cities Receive Modern Urban Planning”	
9. SUGAI Toshihiko, Frontier Sciences, The University of Tokyo	28
“Fluctuating Natural Environment in Asia – Present, Past and Future”	
10. KAWASHIMA Hiroyuki, Agricultural and Life Sciences, The University of Tokyo	30
“100 Years of Biological Resources and Human Beings, 1950-2050”	
11. MATSUMOTO Ryo, Earth and Planetary Sciences, The University of Tokyo	32
“Reading Chinese History from Sediment at the Bottom of Lakes –A geologist’s View”	
12. AKITA Shigeru, Global History and History of the British Empire and Commonwealth, Osaka University	34
“International Order of Asia, the British Empire and Hegemony”	
13. KIBATA Yoichi, Imperial History, The University of Tokyo	36
“Global History and History of Empires”	

2007 年上半年学期 EALAI /ASNET 专题讲义：全球性历史的挑战

1. 水岛司（东京大学）全球性历史的挑战	8
2. 小松久男（东京大学）伊卜拉希姆之旅：俄罗斯·奥斯曼帝国·日本	10
3. 羽田正（东京大学）伊斯兰世界的创造和新世界史	12
4. 黒田明伸（东京大学）货币演说的世界史	14
5. 肯·波梅兰茨（加利福尼亚大学）历史能为世界研究提供什么？	16
6. 岛田龙登（西南学院大学）近代亚洲各国贸易与英国产业革命	20
7. 山下范久（立命馆大学）从世界系统论到全球性历史	22
8. 城所哲夫（东京大学）亚洲各城市如何接受近代都市计划	24
9. 须贝俊彦（东京大学）变动的亚洲自然环境：现在·过去·未来	28
10. 川岛博之（东京大学）生物资源与人类的 100 年：1950~2050	30
11. 松本良（东京大学）从湖泊的沉积物看中国王朝的历史：地质学者的视角	32
12. 秋田茂（大阪大学）亚洲国际秩序和英帝国、霸权	34
13. 木畑洋一（东京大学）全球性历史和帝国论	36

講師紹介



水島 司
MIZUSHIMA
Tsukasa

東京大学文学部・大学院人文社会系研究科 教授
(南・東南アジア歴史社会)。専門は近・現代南アジア。現在は、18-20 世紀南インドを対象に歴史地理情報システム論の研究を行っている。主著は『18-20 世紀南インド在地社会の研究』(東京外大アジア・アフリカ言語文化研究所、1990 年)であり、他に編著『ムガル帝国から英領インドへ』(中央公論社)、『世界システムとネットワーク』(『現代南アジア』6・東京大学出版会)などがある。



小松 久男
KOMATSU Hisao

東京大学文学部・大学院人文社会系研究科 教授 (西アジア歴史社会)。近・現代の中央アジア、特に西トルキスタン史を専門としている。知識人の改革運動、神秘主義のシャイフによる民衆運動の指導などを具体的に描き出す作業を続けている。主著に『革命の中央アジア: あるジャディードの肖像』(東京大学出版会)があり、他に編著『中央ユーラシア史』(山川出版社)などがある。



羽田 正
HANEDA Masashi

東京大学東洋文化研究所 教授 (西アジア研究部門)。専門は比較歴史学。主な著書に『イスラーム世界の創造』(東京大学出版会)、『港町に生きる』、『港町の世界史』2・編著・青木書店)、『シヤルダン「イスファハーン誌」研究』(編著、東京大学出版会)などがある。



黒田 明伸
KURODA Akinobu

東京大学東洋文化研究所 教授 (東アジア第一研究部門)。伝統中国の貨幣・

金融・市場構造・財政、ならびに日本・朝鮮・インド・紅海周辺ならびに西ヨーロッパとの比較研究、16 世紀以降の世界経済とアジア諸帝国との相互連関、貨幣間の補完性についての研究を行っている。主な著作に、『中華帝国の構造と世界経済』(名古屋大学出版会)、『貨幣システムの世界史 : 「非対称性」をよむ』、『世界歴史選書』1 巻・岩波書店)がある。



KENNETH L.
POMERANZ
ケネス・L・ポメラantz

カリフォルニア大学
アーバイン校 教授
Department of History,
UCI Chancellor's Professor of
History。専門は中国近代史。

特に清朝末期から 20 世紀にかけての、国家・社会と経済の相互関係に関する研究や、世界経済の形成を、多数の地域の相互関係から捉える研究を行っている。主要著書に、『The Great Divergence: China, Europe, and the Making of the Modern World Economy』(Princeton University Press), 『The Making of a Hinterland: State, Society and Economy in Inland North China, 1853-1937』(University of California Press) などがある。



島田 竜登
SHIMADA Ryuto

西南学院大学経済学部准教授。専門はアジア経済史。アジア間貿易史や、日本とアジアの経済関係史、オランダ東インド会社史を主に研究している。講義に関係する著作として、『The Intra-Asian Trade in Japanese Copper by the Dutch East India Company during the Eighteenth Century』(Brill Academic Publishers)、「18 世紀における国際銅貿易の比較分析: オランダ東インド会社とイギリス東インド会社」(『早稲田政治経済学雑誌』第 362 号)がある。



山下 範久
YAMASHITA
Norihisa

立命館大学国際関係学部准教授。専門は世界システム論、歴史社会学。マクロなパースペクティブから、空間認識の構造的変容を分析する。主要著書に、『世界システム論で読む日本』（講談社）、『帝国論』（編著・講談社）、訳書に、『入門・世界システム分析』（イマニエル・ウォーラーstein著・藤原書店）がある。



城所 哲夫
KIDOKORO Tetsuo

東京大学工学部・大学院工学系研究科 准教授（都市計画）。専門は途上国都市計画論、市民都市計画論。コミュニティ・レベルでの参加型計画論や、自立的な都市・地域性の形成とローカルガバナンス論、アジア都市計画の制度変容論を論じている。主要著作（共著）に、『都市を構想する』（鹿島出版会）、『都市再生のデザイン』（有斐閣）がある。



須貝 俊彦
SUGAI Toshihiko

東京大学大学院新領域創成科学研究科教授（自然環境学）。専門は自然地理学、自然災害科学、環境動態解析。特に、氷期・間氷期の環境変動と平野の埋積過程についての研究、活断層の分析による古地震の研究、隆起山地の侵食過程の研究を行う。主な著作に、『River Terrace Development by Concurrent Fluvial Processes and Climatic Changes (Geomorphology, 6)』『自然環境の評価と育成』（共著・東京大学出版会）などがある。



川島 博之
KAWASHIMA Hiroyuki

東京大学農学部・大学院農学生命科学研究科 助教授（国際環境経済学）。専門は環境経済学。特に水質汚染問題のシステムモデルによるシミュレーション分析およびリモートセンシング技術を利用した食料生産変動予測の研究を行っている。講義に関係する著作に、『人類生存のための化学上・下』（新産業化学シ

リーズ 19 巻・共著・大日本図書）、『東京湾-100 年の変遷』（共著・恒星社厚生閣）がある。



松本 良
MATSUMOTO Ryo

東京大学理学部・大学院理学系研究科 教授（地球生命圏科学）。専門は、堆積学・化学堆積学。浅海成炭酸塩岩の堆積相解析と化学層序から地球環境変動の解明、海洋ガスハイドレートの環境への影響と資源ポテンシャルの評価、劇的環境変動要因としての「ガスハイドレート仮説」の実証を行っている。主要著作に、『Comparison of Marine and Permafrost Gas Hydrates: Examples from Nankai Trough and Mackenzie Delta (Proc. 4th ICGH)』『メタンハイドレート：21 世紀の巨大天然ガス資源』（共著・日経サイエンス社）がある。



秋田 茂
AKITA Shigeru

大阪大学文学部・大学院文学研究科 教授（西洋史・世界史）。専門は、イギリス帝国史及びグローバル・ヒストリー。19-20 世紀のイギリス史を帝国・コンウェルスとの関係から研究し、特に南アジア、東アジア諸地域と近現代イギリスとの関係を、政治外交史と経済史の両面から追及する。主要著書に、『イギリス帝国とアジア国際秩序—ヘゲモニー国家から帝國的な構造的権力へ』（名古屋大学出版会）、『パクス・ブリタニカとイギリス帝国』（編著・ミネルヴァ書房）、*Gentlemanly Capitalism, Imperialism and Global History*（編著・Palgrave-Macmillan）などがある。



木畑 洋一
KIBATA Yoichi

東京大学教養学部・大学院総合文化研究科 教授。専門はイギリス現代史・イギリス帝国主義史・第二次世界大戦期およびその前後の国際関係史。現在の関心の中心は、アジアにおける英帝国の脱植民地化過程や帝国意識の国際比較など。主要著書・論文に、『Anglo-Japanese Relations 1600-2000. Political-Diplomatic Dimensions, 2vols.』（共編・Macmillan）、『国際体制の展開』（山川出版社）、『帝国のたそがれ』（東大出版会）がある。

グローバル・ヒストリーの挑戦

水島 司

第1回：2007年4月16日（月）

講義内容

今回の講義では、テーマ講義全体のイントロダクションを行い、グローバル・ヒストリーの潮流の持つ意味と意義が提示された。

1. 東アジア史の謎

東アジア史には「18世紀の謎」がある。すなわち一人当たり耕地面積の減少、人口の3倍増、そして生活環境の向上が同時に達成されたことだ。これは現在、資本節約的・労働集約的径路で達成されたと考えられている。

そもそも、マルサス理論に従えば、人口増減と食糧生産はつねに連動し、実質賃金自体は上がらない。また、「リカードの罨」によれば、食料需要の増大(人口増)は良地不足による生産費用の上昇と資本利潤率の低下を招き、経済は停滞へ向かうはずである。「18世紀の謎」は、これら古典派経済学の諸理論では説明できない現象だった。

この課題を解決するために導入された概念が、「外延的成長」「内延的成長」である。前者は、生産性向上抜きに労働・土地・資本を投下しつづけて起こる成長で、西漸期のアメリカがこれにあたる。いっぽう内延的成長は、生産力向上を主眼とする。東アジアの18世紀は、土地や資本の稀少性を、家族労働の充分な吸収のための技術的・制度的工夫によって克服した時代であった。

内延的成長は、いわゆる「勤勉革命 Industrious Revolution 論」と深く関係している。18世紀以降の日本では従来型の新田開発が限界を迎え、土地への人口圧が増加したため、人口増加は抑制された。いっぽうで農業生産量は25%増加し、人口当たりの生産性は向上した。これは労働集約による現象であり、内延的成長の代表例とされる。

このような労働集約を、メンデルスは「プロト工業化」と呼んだ。つまり、農民による労働集約を工業化の第一段階だとみなした。東アジアのプロト工業化は綿・絹業を中心に起こったが、そこでは生産地の地理的分業にとどまらず、家庭内分業(「男は田畑」「女は機織り」)が進んだ。

東アジアが土地生産性を向上させていたとき、ヨーロッパでは労働生産性が向上していた。産業革命以前のアジアとヨーロッパでは、別径路で大きく生産性が向上していたわけである。

2. グローバル・ヒストリーの視点

なぜ今、グローバル・ヒストリーなのだろうか。5

つの理由を挙げてみよう。

(1) 国民国家史観批判とそこからの脱却

グローバル・ヒストリーは、従来の国民国家史の寄せ集めである「世界史」とは異なり、相互関係に注目する。国民国家史観に基づく歴史学の縦割りに対する疑問や、「自虐史観」派およびその反対派双方による地域の連関性・同時性・同所性への配慮を欠いた論議への批判、あるいはランケの近代実証主義歴史学が普遍性への指向を失い排他的な国民国家史へ向かっていったことへの反省が、グローバル・ヒストリー台頭の背景にある。

(2) 国境を超える過去と現実の事象への歴史学からの対応

移民や疫病、帝国主義、ネットワーク、グローバル化など、国民国家史の枠組みでは取り組む枠組みすらない問題が近年増えている。それらに対し、グローバル・ヒストリーはひとつの方向性を示している。

(3) 国民国家システムの揺れと、地域システムへの着目

従来の国民国家システムを乗り越える流れ(EU や ASEAN など)があるいっぽう、国家より小さなシステムへの胎動、つまり各地のエスニシティ運動もみられる。この潮流に柔軟に対応できる可能性をもつのが、グローバル・ヒストリーである。

(4) 「アジア大文明圏」復権論：インドと中国の台頭を背景として

ごく最近まで、アジアは「停滞」の象徴だった。しかし近年、「なぜアジアは成長したか」という問いが起きている。グローバル・ヒストリーは長期的・広域的な視野からこの変化を視る。

(5) 歴史の普遍性と特殊性に関する視点の変化：アジア特殊論とイギリス特殊論

アジア的生産様式論やオリエンタリズムは、アジアを特殊なもののみなしてきた。しかし、ポメラント(K. Pomerantz)は、1750年以降150年間のアジアと北西ヨーロッパの「大いなる分岐」は「偶然」にすぎないと主張し、アジア特殊論を見直す契機となった。第一に、彼によれば、イギリスは東アジア諸都市に比して炭鉱に近接していた(地理的偶然と重商主義)。第二に、新大陸に近かったため、東アジア的プロト工業化が不要だった。

3. グローバル・ヒストリーとアジア

以上のようなアジア「見直し」論の基底には、欧米

中心史観への批判がある。それは、従属論を批判し独自の経済圏の存在を主張する人々や、「ウェスタン・インパクト」論を克服し近世アジア自身に転換の要因をみよとする研究者のなかから提起された。

4. Great Diversion 論をめぐって

ポメラントの「大いなる分岐」論を支える研究が誕生している。プラサンナン(P. Prasanna)は 18 世紀の

労働賃金(実質賃金)をイギリス・南インドで比較し、南インドは農業生産性が高く、穀物価格が低く抑えられたために、両地域は穀物換算の賃金では同水準であったとした。

(文責：浦田)

授業アンケートから

高校のとき、いつのまにか西洋を東洋の上に位置づけていたのに気づいた。だが今日の講義で自分が東洋史を西洋との対比でしか捉えていなかったことにも気づいた。染みついている考えを変えるのは難しいが、アジアを中心にみる世界も楽しそうだ。(1年・文Ⅰ)

ヨーロッパ中心史観の見直しは新しい時代を感じさせるが、アジア復権を主張するあまり、アジア中心史観で世界を覆っては元も子もないと感じた。(1年・文Ⅲ)

扱っているのは既存の統計や歴史的事実なのに、意味づけや因果関係の説明でまるで違った歴史観が生まれてくる。そういう面白さが歴史学にはあるのかと思った。(1年・文Ⅲ)

世界の一体化が進み、一国だけの努力ではどうしようもない問題が数多く起こっているのに、現実ではその問題に取り組む体制がない。今回の講義で、国境を越えて起きている事象に目を向ける広い視野をもつことが重要だと感じた。(1年・文Ⅲ)

現代まで続いている歴史観を批判し、新たな視点から歴史を捉えなおすという姿勢に興味をもった。この授業では世界史を「世界史」として見つめなおし、あわよくば現代の世界をも考えてみたい。(1年・文Ⅰ)

最近の学問の傾向は、ひとつの領域にとどまらず複数の分野にまたがって考えるようになってきた。グローバル・ヒストリーも同様に、一国史的な考えでは対応できないことのために、地球的な視点をもつことで、より多くのことが理解できるようになるのだと思う。(2年・文Ⅲ)



Photo: URATA Yosuke インド農村のヤギ

イブラヒムの旅：ロシア・オスマン帝国・日本

小松久男

第2回：2007年4月23日（月）

講義内容

汎イスラーム主義者であるアブデュルレシト・イブラヒム（1857-1944）という個人の行動に焦点を当てることによって、各国史のような従来の枠組みでは光が当てられることがほとんどないイスラーム世界と日本との関係について講義がなされた。

1. ロシアにおけるイブラヒム

西シベリア生まれのタタール人であるイブラヒムはロシア帝国において、1892年から1894年までムスリム聖職者協議会のカーディー（裁判官）を務めていたが、帝政ロシアの対ムスリム政策に不満を持っていた。1905年の第1次ロシア革命後、ロシア・ムスリム民族運動の指導者となり、改革と自治の構想を示した。

2. ユーラシア大旅行と日本訪問

イブラヒムは1907年から1909年にかけてユーラシア大陸を1周する旅に出た。そして最も滞在期間が長かったのが、1909年1月から6月まで滞在した日本であった。日露戦争における日本の勝利に触発されたからである。

日本滞在中イブラヒムは、日本と日本人の詳細な観察を行った。その日本人には、庶民から伊藤博文や大隈重信といった大臣クラスまでが含まれていた。彼は、日本の急速な発展の要因を次の2つの点に求めた。1つは、日本が西洋の文物を選択的に受け入れたこと、もう1つは、日本人の美德と「民族精神」を護持していたことである。こうした考察を基にして、イブラヒムは日本の事情をムスリム読者に向けて発信した。

日本についての考察を深める中、イブラヒムは壮大な構想を持つにいたった。西欧列強による世界秩序が日本の台頭によって転機を迎えており、この機会にムスリム諸民族の解放と独立を目指そうと考えた。イブラヒムは日本のアジア主義者に近づいていった。とりわけ、黒龍会の内田良平や頭山満らと親しくなった。

こうした交流の結果、1909年6月7日に亜細亜義会が結成された。亜細亜義会には、アジア主義者や陸軍参謀本部のメンバーらが参加し、イブラヒムは中国ムスリムの指導者にも接触した。イブラヒムは、亜細亜義会を通してイスラーム世界の地政学的な重要性を説いた。その一方で、亜細亜義会の活動をイスラーム世界に紹介する広報活動を行った。

3. 戦争と革命の中のイブラヒム

日本を離れたイブラヒムは、旅の終着点イスタンブルへ向かった。ちょうどその頃、オスマン帝国は、1908

年の青年トルコ人革命を契機として、汎イスラーム主義からトルコ主義へ向かっていた。イブラヒムは、メッカにおけるイスラーム世界連合という自らの構想をあきらめざるを得なかった。しかし一方で、汎イスラーム主義のジャーナリストとして『イスラーム世界：日本におけるイスラームの普及』を1910年に刊行した。

イブラヒムにとっての好機は、第1次世界大戦とそれに続く1917年のロシア革命にあるように思われた。大戦によってイスラーム世界の防衛という大義の下に汎イスラーム主義への回帰が期待できたとし、ロシア革命によってロシア・ムスリム解放の夢が実現できるかもしれないからである。イブラヒムはソヴィエト・ロシアへ向かい、1918年から1923年まで滞在した。しかし現実には、イブラヒムの望む方向に進まなかった。また、イブラヒムは1923年にイスタンブルに戻るが、オスマン帝国自体もその年のトルコ革命によって共和制に移行し、汎イスラーム主義が否定されることになった。失意のイブラヒムのもとに、アンカラ駐在日本人武官が訪れた。イブラヒムは、再び日本を訪れる決心をした。

4. 再来日したイブラヒム

1933年10月12日にイブラヒムは再来日を果たした。1930年代における日本のアジア進出は、アジアのムスリムとの接触の機会を増やし、日本におけるイスラーム世界への関心を促していた。つまり、日本は「東亜新秩序」に向けた満蒙や東南アジアでの連携工作のためにイブラヒムを必要としていた。こうして日本は表向き、イスラーム教の指導者としてイブラヒムを招聘した。そして実際、イブラヒムは、1938年5月12日に落成した代々木モスクのイマームとなった。

一方、イブラヒムにも日本再訪の理由があった。約30年前の日本と今の日本を比較したいと考えていたのである。また、日本人がイスラーム教に対して抱いている誤った認識を是正しなければいけないという使命感があった。実現はしなかったが、日本で自伝を書くことも望んでいた。

さらに、イブラヒムはイスラーム世界と日本との関係を発展させたいと思っていた。なぜなら、「東亜新秩序」と汎イスラーム主義にとって共通の敵である西欧列強に対して、ともに立ち向かうことは理にかなうと考えていたからであった。事実、イブラヒムは、『新日本通報』というムスリム読者向けの雑誌に寄稿して、海外に日本の事情を紹介しながら、日本の対外政策に

対する支持と支援を訴えた。日本の国際連盟脱退を支持することを表明したり、来るべき大戦争において日本を支援することはジハードであると主張したりした。

老齢を押して再来日したイブラヒムは、汎イスラーム主義の復権と「東亜新秩序」の行く末とをみることなく、1944年8月17日東京に没した。

5. おわりに

イブラヒムを通してイスラーム世界と日本との関係を見てきたが、この分野の研究はようやく始まったところである。とりわけ、日本の対イスラーム政策の展開は新しい研究領域である。そのため、中国回族と日本人との関係や汎イスラーム主義者とアジア主義者との関連などに関する研究成果が待たれる。また、イブラヒムの主著『イスラーム世界』の意義を考察することも重要であろう。なぜなら、その著作は20世紀初

頭のイスラーム世界の一断面を示すとともに、イスラームの日本と日本人に対するイメージの源泉の1つになっていると考えられるからである。日本の著名なイスラーム研究者、井筒俊彦（1914-1993年）との交流というエピソードも興味深い。

質疑応答

Q：イブラヒムは日本においてソ連のスパイだとはみなされなかったのか。

A：そのようにはみなされていなかっただろう。なぜなら、スパイ活動をするには老齢であったし、なによりも日本がイブラヒムを招聘したからである。実際、日本当局はロシア・中央アジアからの亡命イスラームに監視の目を光らせていたが、イブラヒムの活動に対して制約を加えたり本人を拘束したりすることはなかった。（文責：畑中）

授業アンケートから

「歴史」が研究や学習の中で垣根を自然と作ってしまうことが多い中で、そういう垣根を取り去った物の見方の大切さを教えられたように思う。（2年・文Ⅲ）

西欧列強の支配に対抗するにあたって日本とイスラーム世界の連帯を説いたというのは当時では非常に斬新な発想だったのではないかと思います。また発想のみにとどまらず、実際に日本人や中国人のアジア主義者と交流を持ったという話を聞き、自らの足で直接世界を歩き回り経験するということの大切さを実感しました。（1年・文Ⅲ）

近代の日本とイスラーム世界とのつながりは、日露戦争が影響を与えたというぐらいしかないと考えていたので、今回の話はとても新鮮で興味深いものでした。イブラヒムが構想していた日本とイスラームの連帯、あるいはイスラーム世界連帯が実現していたら20世紀の歴史は変わっていたかもしれないと思います。（1年・文Ⅰ）

今回の講義はイスラーム世界を身近に感じつつ学ぶきっかけになったと思う。徒歩で日本をめぐるというイブラヒムほどの情熱を持ってイスラームのことを学びたいと思った。（1年・文Ⅰ）

イスラームとはほとんど関係ないと思っていた日本とイスラームを結びつけた人が過去に存在したことには驚きました。日露戦争における日本の勝利が、アジア・ユーラシアに伝播し、ナショナリズムを高揚させたという史実は知っていたが、これの担い手には、イブラヒムなどの人物がかかわっていたことを垣間見ました。自分が知っている史実に、いかにイブラヒムとイスラームがかかわっているかを思い知らされました。（2年・文Ⅲ）

今回の講義から歴史研究にはまだまだ未開の部分があるということがわかり、そういった部分の研究を進めることが、グローバル・ヒストリーを目指すためにも役立つのではないのでしょうか。しかし、これまでの勉強の中で歴史研究が歴史を重ねるとそれだけいっそう研究領域が広がっているように感じたので、グローバル・ヒストリーの構築は徐々に難しくなっているのではないかと考えました。ところで、イスラーム世界には名のある旅行家が多くいるように思いますが、これには何らかの要因を見出せるのでしょうか。

（1年・文Ⅰ）

先頭に立って、文化・言語の違いを超えて新たなつながりを築いていくイブラヒムの生き方は、非常に魅力的であり、その強い意志に勇気付けられた。（1年・理Ⅰ）

イスラーム世界の創造と新しい世界史

羽田 正

第3回：2007年5月7日（月）

講義内容

1. イスラーム世界とは

何をもち「イスラーム世界」というのかは明確でない。近日の新聞社説(2007年5月)でも、「イスラーム世界」は曖昧な概念として利用されている。専門的辞典でも定義は曖昧である。平凡社『イスラーム辞典』では、イスラーム諸国会議の参加国をひとつの目安にしているが、それは国内ムスリム人口の多寡と必ずしも関係していない。『イスラーム辞典』(岩波書店)内「イスラーム世界全図」でも、各国別のムスリム人口比率を表したものにすぎず、イスラーム世界を定義するものではない。

2. 19世紀のヨーロッパ思潮が生み出した「イスラーム世界」

「イスラーム世界」という概念は、19世紀ヨーロッパに起源があると思われる。

ヨーロッパにおける18世紀後半までの世界認識では、歴史は国家(Nation)の対立で動くと考えられていた。しかし19世紀、ヨーロッパは自らを「プラス」の体現者とみなした。世俗主義はその代表であり、ここに自己の反対象として、政教一致した「イスラーム世界」が認識された。たとえばルナン(Joseph-Ernest Renan)は、イスラーム教徒がいれば、あらゆる他の特徴を越えて「イスラーム世界」である、と考えていた。ヨーロッパにおけるナショナリズムと植民地主義も、「イスラーム世界」認識の発生と深く関係している。

他方、ムスリムの自己認識を考察すると、汎イスラーム主義者たちは、ドイツが統一・イタリア国家の成立に刺激され、ヨーロッパの国民国家と同様に「イスラーム」も固有の存在たりえと彼らは考えた。イブラヒム(本講義第2回参照)の考えた「イスラーム世界」も、上記の文脈でとらえるべきだろう。

いずれにせよ「イスラーム世界」は、二項対立的な概念を含んでいる。それは現代でも同様だ。ブッシュ米大統領の「十字軍」発言にはじまり、現代イスラーム主義者も、地理的に括れないものをイデオロギ的に「イスラーム世界」として実在させようとしているにすぎない。

3. 世界史教科書教育の影響を考える

日本において「イスラーム(世界)」という言葉はもはや「錦の御旗」である。これによってすべての現象は宗教で説明され、内実の探求を放置できるからだ。このように「イスラーム世界」が普及した理由を、高

校世界史教育に求める。

1956年版学習指導要領で「イスラーム世界の発展とその文化」が登場した。以来半世紀にわたり、「イスラ(一)ム世界」は世界史教育で使用されつづけている。しかし、現代世界の記述には「イスラーム世界」はない(「西アジア」は存在する)。にもかかわらず「イスラーム世界」は実在すると一般に考えられている。

教科「世界史」の特殊性を考えると、「世界史」のおかげで他国史を深く知られる利点は否定できない。いっぽうで、他国の歴史を日本(人)が書く行為には、つねに対象国の自己認識と齟齬が生じる可能性がつきまとう(いわゆる歴史認識問題)。

4. 強調されることのない「歴史」の役割

歴史の対象が「実在する」と意識されるゆえに、「対象」は記述されている(19世紀西欧近代歴史学や明治日本の「国史」など)。この作用を考慮すれば、「イスラーム世界の歴史」を記述することで「イスラーム世界」は実体化することになる。現在、イスラーム世界を実体化させようとして多くの悲劇が起こっている(ユーゴ紛争、パレスティナ紛争など)。羽田教授は、「イスラーム世界」という枠組みを使った歴史の研究や叙述を行わないことにした。

したがって、世界史の記述を改め「世界はひとつ」という理念を可能にする世界史記述が必要である。「環境」や「人間」を主語にすることで、新しい世界史記述ができるかもしれない。

質疑応答

Q: 「世界はひとつ」の意味と、その実体化の意義は。

A: 「ひとつ」と凡一は別物である。グローバル化は紛れもない事実であり、個人内で国民国家の位置づけは低くなっている。ゆえに「世界」にアイデンティティをもつ人が登場する可能性は大きく、そこに歴史学は貢献しうるだろう。

Q: 高校地歴科が「世界史」「日本史」「地理」に三分されていることについて。

A: まず大学レベルで、文理の枠を超えた学問を創成すべきである。日本史・西洋史の枠組みが確固たるゆえに、アジア史から発信できる可能性がある。

(文責：浦田)

授業アンケートから

漠然と描いていた「イスラーム世界」という概念が崩れた。この言葉で、自分にとって遠い世界をひとくくりにしてしまっていたように思う。(1年・文Ⅲ)

世界中には様々な人々や環境がある。「世界はひとつ」という考えが、世界内部の差異を考察しにくくする問題もあろう。「世界はひとつ」と「人はみな違う」という双方の概念を同時に満たす考え方を求めている。(2年・文Ⅱ)

「世界はひとつ」という理念を実体化することがよいことなのか、疑問だ。「イスラーム世界」だって、世界史が理念を実体化させたにすぎない。そもそも、「世界はひとつ」において、アイデンティティをどの枠組みで設定するのか疑問である。(1年・文Ⅲ)

今回一番認識が変わったのは、歴史というものは既に客観的に存在しているのではなく、編者により束ねられかたが変わる(主観的なもの)ということだ。しかも、それが各人に大きな影響を与えるからこそ、グローバル・ヒストリーについて考えることの意義深さをより知った。(2年・文Ⅲ)

世界史の捉え方に関わらず世界の一体化が進むと「世界はひとつ」という立場で歴史を書かざるをえない。どう実現するのか羽田先生の研究に興味をもった。他の研究者も自らの分野に固執せずこういう試みをしてほしい。(1年・文Ⅲ)

「イスラーム世界」は実在的世界だと思っていたが、今回の講義で自分の認識を正せた。「世界」を実体化させる歴史記述には注意すべきだし、誤解を招かない「世界史」を学ぶことで、現実の問題を考える基盤を身につけなければいけないと思う。(1年・文Ⅰ)

グローバル・ヒストリーの名にふさわしい世の中になるにつれ、歴史がどう語られるのかがどんどん難しくなっていく気がする。(2年・文Ⅱ)

現にいま日本というまとまりとイギリスというまとまりが異質な面を持つ(言語・文化など)のは事実で、日本やイギリスのたどってきた道、いかにして今日の形態になったという差異を認識する上で、近代歴史学も有効なのではないか。世界中の人が、世界中の、自分とは異質な人間を理解する手段として、今の「世界史」は必要なのではないか。(3年・経済学部)

全体を見て、共通の中での差異としてお互いをとらえるという考え方に感銘を受けた。(2年・文Ⅲ)



Photo: OTSUKA Osamu サマルカンド、レジスタン広場

貨幣たちが語る世界史：その非対称性・多元性・補完性

黒田 明伸

第4回：2007年5月14日（月）

講義内容

貨幣とは何か。貨幣システムはどのように形成されるのか。これらの問いを考えるにあたって本講義では、まず貨幣論への導入としてマリア・テレジア銀貨がとりあげられた。そして次に、中国とヨーロッパの貨幣システムを通時的に比較することで、社会関係の差異が貨幣システムの形成に影響を与えたことが説明された。

1. マリア・テレジア銀貨と交易の論理

ウィーンで鑄造されたマリア・テレジア銀貨が、オーストリアから遠く離れたエチオピアで20世紀初めまで流通していた。1880年にエチオピアを旅行したフランス人によれば、マリア・テレジア銀貨は商人の間で流通していた。そして、一般庶民の間では、Amoleという塩の延べ棒が交換手段となっていた。というのも、銀貨1枚は現地の庶民にとって高額通貨で、日常的な小売には適さなかったからである。また、庶民の間では物々交換もなされていた。

こうした状況で、フランス人旅行者は馬に与える大麦を買おうとした。ところが、一筋縄ではいかなかった。まず銀貨を塩の延べ棒に換え、その延べ棒で穀物のテフを買い、さらにテフを小麦と交換し、そして小麦と引き換えて大麦を手に入れることができた。

以上のエピソードから、貨幣の非対称性を導くことができるだろう。つまり、銀貨1枚の効用が商人と庶民とは異なることから、銀貨1枚とそれでは買えるはずの量の小麦との等価交換が成立しないのである。実際、銀貨1枚よりも銀貨1枚分の塩の延べ棒のほうが庶民にとっては使い勝手が良いのである。あるいは、庶民は自分の物と欲しい物とを交換することを望んでいるのである。

また、交易がどのように発生するのかについても従来の論理とは違ったものが見えてくる。一般的に、異なる財を所有する者の間で交易が生じると考えられている。つまり、「財の交換」という論理から交易が導かれる。ところが、空間的には狭くて庶民が集まるような市場では、穀物、塩、あるいは衣類といった物に取引が集中しており、誰もが似たような物を持つと同時に似たような物を欲しているというのが実情に近かった。それではなぜ同じ物を持つ者の間で交易が生じたのか。それは、欲しい時が違うからであった。すなわち、「時の交換」という論理が働いていたといえよう。

2. 13～14世紀の中国とヨーロッパ

この時期のアジアとヨーロッパを交易という観点から比較すると、前者では銅銭で売買がなされており、後者では特に銀貨で取引が行われていた点に特徴がある。中国では14世紀以降に銅銭の輸送コスト削減のために紙幣も多く使われるようになったが、庶民の間では銅銭の使用が普通だった。一方、地中海ヨーロッパでは、銀貨で取引が行われていた。しかし、銀貨の供給と物価が連動しているわけではなかった。例えば、パン1ローフの値段は、1デナリウス銀貨で大きいのが買えれば下がったことになり、小さいのしか買えなければ上がったことになったのであった。また庶民は、価値尺度として銀貨を用いることはあるが、実際の売買では小麦や布を貨幣として用いていた。

こうしたことから、貨幣の多元性が浮かび上がってくるだろう。また、銅銭や現物は、高額面通貨では扱いにくい取引を補完する性質を持っているといえるだろう。

さて次に、アジアとヨーロッパとの間の取引についてみると、13世紀初めに出現したモンゴル帝国のインパクトが大きかった。ユーラシア大陸の東西にまたがるモンゴル帝国は、海陸の交通路を整備して様々な取引コストを軽減させることによって、遠隔地交易を飛躍させた。こうした中で、ロンドンでは14世紀前半に銀貨の鑄造がピークとなった。これは、ベンガルの銀鑄造のピークに重なっている。当時モンゴル王朝の指令下で中国雲南の銀鉱山で銀が採掘されていたが、その銀がロンドンに来たのかもしれない。いずれにせよ14世紀半ばには、中国でも銀貨が使われるようになり、また地中海では銀不足が解消されていった。

3. 16～17世紀の中国とヨーロッパ

近代に入ると、中国とヨーロッパの都市部は銀の流通でつながった。しかしナショナルなレベルでは、通貨システムのあり方が異なっていた。

中国では、財政上は庫平両という高品位の銀単位に鑄直して納税することになっていた。そして実際、北京の銀ストックは、1693年の約2,760万両から1782年の7,800万両へと3倍近くに増加した。ところが地域市場における交換は、地域ごとに多様性を持っていた。また、庶民は銅銭で取引をしていた。

一方ヨーロッパでは、各国の貨幣供給と物価が連動するようになった。同時に、庶民の間で銅貨の使用が徐々に広がり、貨幣たちの互換性が一国単位でできてきた。このため、国が違えば互換性に差異が生じたが、

こうした通貨システムのあり方は公債発行を可能にした。例えば、1783年のイングランドでは2億4,500万ポンドの公債が発行され、これは同じ年の歳入である1,200万ポンドの約20倍であった。

最後に以上の通時的な比較をまとめると、ヨーロッパでは、領主や商人たちの間の銀貨による取引と、農村での商品貨幣あるいは銀表示のバーター取引との間が乖離する傾向があったといえるだろう。これに対して、中国では、低額面通貨である銅銭に庶民の使用が限られていたため、通貨使用の頻度をより密にする志向があったといえる。換言すると、ヨーロッパは地域間決済通貨に、中国は現地通貨に傾斜しやすい通貨のあり方であったということになるだろう。このような異なる通貨システムの並存状況は、19世紀まで続いた。そして19世紀以降になると、1国家1通貨の流れに変わっていった。

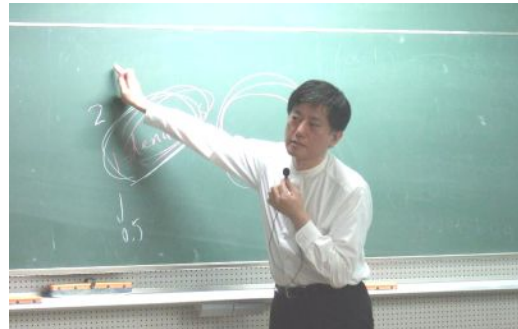
質疑応答

Q：貨幣の連動は帝国と関係あるか。

A：ある。国債発行と長期資本市場が帝国主義政策を可能にした。

Q：多様な貨幣とグローバリゼーションとの関係についてどう思うか。

A：従来は貨幣の多元性は縦方向であった。ところが、例えば国境を越える短期資本にみられるグローバリゼーションのものでは、貨幣が横方向の多元性に移行したといえる。
(文責：畑中)



授業アンケートから

同じモノを持っていても欲しいときが違うから交換が成立するというのは思いもよらなかった。(1年・文I)

紙幣が最初に使われたのは中国だということは知っていたが、その成立原因を今日説明してもらえると納得できた。紙幣と小銭を併用するというのは煩雑そうに思えるが、実は貨幣システムからすると、一番安定するのだということを実感しました。(2年・文III)

最後の質問のときに先生がおっしゃっていた、同じ労働に対しての報酬が異なるという話は面白かった。しかし、先生が説明されていたことは、貨幣価値が違うからと片付けてしまうこととどこが違うのかわからなかった。私は同じことを言っているように思った。(1年・文III)

気になるのは、現在のグローバリゼーションで大きな潮流となっている”貨幣統合”の動きだ。EUにおけるユーロのような通貨統合が進めば(とは思にくいだが…)、貨幣の持つ補完性の働きが失われてしまう。果たしてそれはいいことなのかと思った。(1年・文I)

ヨーロッパのあたりと中国のあたりでは違う貨幣制度が存在していたことと、それが共存してきたことは意外な感じを受けた。(2年・文III)

同じ労働に対する報酬が違うということは当然でないというのは新鮮だった。また、1万円札と10円玉1000枚が常に等価でないことが理解できた。お金の絶対の価値があるわけでないと感じた。(1年・文I)

貨幣に注目することで当時の経済動向や地域間の結びつきが見えてきて面白いです。”グローバル・ヒストリー”にぴったりなテーマだと思います。(文I)

貨幣を世界共通にすることができるかどうかは興味があったが、無理そうなので残念だった。(2年・理II)

What Can History Offer to Global Studies?

Kenneth L. Pomerantz

May 21, 2007

which understood the rest of the world in terms of

Summary of Lecture

1. World History – History as a Connection among Regions

The world is more interconnected today than ever before, but the connection is extremely uneven. This fact is often overlooked by “globalization” as a concept. World history as a new discipline of history attempts to deal with trans-regional networks, not simply emphasizing global interconnections. For example, the rate of international migration (2.9% of all people live outside the country of their birth) today is almost the same as 1913, which might be curious from the perspective of globalization. But the point is that the movement of people today is less important than that of goods and capital. In addition, there are also distinctive characteristics of modern migration; for instance, today, half of migrants are women, and much more places are participating in international migration than ever before. Moreover, in today’s world, a national state is still strong, which is also difficult to understand by the concept of “globalization.”

What we should study is the extent, density, and limits of particular networks among regions and how the shape of those networks changes throughout the history. To put it in another way, it is necessary to study the interplay between local, regional, and trans-regional levels, which consists of the object of the study of world history.

An aim of world history is to decentralize European centered model; it emphasizes distinct regional features rather than homogeneous global modern, which leads us to think of “multiple modernity.” In this sense, regions are not separate pieces, but a region itself is created within the worldwide network.

Therefore, instead of looking for a region as an area sharing its unifying cultural essence, which is what old area studies do, what the newer kinds of regional studies are trying to do is to look at regions that are forming interactions; interactions define particular regions, not cultural identities.

2. World History – as Comparisons

In order to overcome a binary distinction between the West and the rest, we need reciprocal comparisons. Traditional comparisons were based on the Western model,

deficiencies in the European line. In contrast, some postmodernists avoid comparisons altogether in order to criticize eurocentrism, which has not been enough. Reciprocal comparisons (1) need not involve Europe at all. (2) These comparisons treat each term as being peculiar from the vantage point of the other. (3) Not comparing truly independent entities, they analyze entities that are always affecting each other in some systematic way. (4) Useful comparisons must begin with some similarities. It is worth remarking that in such comparisons, regional specialization is still important.

From this perspective, world history could be summarized as historically based studies of trans-regional comparisons and connections. One possible consequence of studying world history is that its narrative could create global human identity, as national history became a power of creating national citizens in the nineteenth century. Moreover, teaching world history makes students think of global, local, and intermediate levels of analysis, and can provide them with different lenses to study history.

Questions and Answers

Q : Do you think there is any difference between world history and global history?

A : I advocate, particularly in the US, world history in comparison with global history. In the US, people advocating global history are usually overemphasizing connections and ignoring comparisons. The meaning of world history is not the same in every country. In the US, world history is more inclusive than global history.

Q : What factors in your everyday life do make you study Chinese history?

A : Any history radically differs from your everyday life. Such history can remind us of how our modern society is historically unusual, which is very important for us.

What Can History Offer to Global Studies?

ケネス・L・ポメラント

第5回：2007年5月21日（月）

講義内容

1. 地域のつながりの歴史と「世界史」

「グローバリゼーション」と呼ばれるように、世界はかつてないほどつながりを深めているが、その度合いは極端にむらがある。歴史学の新しいディシプリンとしての、「世界史 World History」は、地域を越えたネットワークを扱う。ただし、それは単にグローバルな繋がりを強調するものではない。たとえば、国境を超えた移民の割合（人口の2.9%）そのものは1913年時点と変わらないけれども、私たちはむしろ、人間の移動がものや資本の移動よりも重要ではないことや、現在の移民の明確な特徴（その半数が女性であること、移民に関わる地域が増加していること）に注目すべきなのである。一方、現在も国民国家という枠組みは強固で、グローバリゼーションの概念で理解することは難しい。

私たちは、第一に地域間の個々のネットワークの持つ範囲や密度、限度、第二に、歴史的にそれらのネットワークがどう変化していったか、を考察すべきである。ローカルやリージョナル、トランスリージョナル、各レベル間の相互作用を考え、世界史の考察対象とするのだ。

世界史の目的のうちの1つは、ヨーロッパ中心モデルを脱することだ。グローバルな近代のありかたではなく、個々の地域の特徴を強調することで、「複数の近代性」を想定することができる。その意味で、地域とはばらばらの破片ではなく、世界的なネットワークのなかでつくられたものである。

したがって、ある地域は、統一された文化的要素で構成されるとみるかわりに、相互作用をつくりだすものと考えられる。文化的要素ではなく、相互作用こそが、地域を形作る。

2. 比較としての「世界史」

「西洋-その他」的な二項対立図式から脱するには、両者を対等な比較におくべきである。かつての比較とは、西洋的なものの有無を指摘するだけだった。ポストモダニストには対照的に、

ヨーロッパ中心主義を批判するために比較をやめた者もいたが、それは充分には達成されていない。対等な比較とは、第一にヨーロッパを含める必要は全くない。第二に、それぞれの対象を優劣で論じない。第三に、真に独立した実体というよりも、実体は互いに影響を与えあっているものとして比較することだ。第四に、有用な比較とはなんらかの類似性への注目を手始めにすべきである。地域を特殊化することが依然重要なのは、指摘しておくべきことだ。

以上の観点に立つと、世界史とは、地域間の比較とつながりの考察に基づいた学問、と要約できよう。世界史を学ぶことで起こりうるのは、世界史の語りがグローバルな人間のアイデンティティを形成することだ。それは、国民国家史が19世紀的な国家の国民を形成する力になったのと同様である。さらにいえば、世界史を学ぶものは、ある分析をグローバルやローカル、そしてその中間的なレベルにおいてもできるだろう。それは、歴史をみるさまざまな目を提供することになるのだ。

質疑応答

Q：（本講義の）「世界史 World History」と「グローバル・ヒストリー」という用語に、違いはあるのか。

A：アメリカではとくに、両者は対照的に扱われている。後者の研究者は、つながりばかりに注目し、比較作業を無視しているという印象をもたれる。といっても、「世界史」という語の意味付けは国によって違う。アメリカでは、「世界史」のほうが、より広範な考察を行っていると言われる語である。

Q：なぜ中国史研究を専門に選んだのか。

A：どんな歴史も、普段の生活のありかたと大きく異なるため、わたしたちの近代社会が歴史的に普通なものではないことに気づかされる。このことは私たちにとってとても重要なことであると思う。

授業アンケートから

Since comparison itself is based on Western ways of thinking, as professor said, it seems pretty difficult for me not to be biased by Western ways of thinking in history. Maybe I need to pay attention to Islamic, Chinese or other methods of studying history. I rediscovered how limitless the possibilities of history can be, when professor talked about the difference between human and chimpanzee history. (1年・文I)

ポメラッツ先生は“World History”というものを「動き」でとらえている印象がした。私は「世界史」を学ぶとき、机上の乾いて固定された事実を並べかえていただけかもしれない。歴史という概念を「今」と切りはなしすぎていたことに、今回の講義で気づいた。(1年・文III)

世界の変化を認識するための情報源はさまざまで、その中で一人一人がWorld Historyをつくり、共通の認識に至るのは困難に感じた。しかし、講義のように、地域的なつながりから考えていけばその切り口はつかめるかもしれない。(1年・理I)

「歴史」とは幅の広い概念で、一人の人生史から地球の時の流れまで表せる。ある国/地域/都市等の歴史が、世界の歴史のなかでどんな位置を占めるか、相対的な視点から考えることは、これからの世界で私たちが何をすべきか考えることにつながると思う。(1年・文I)

先生は中国史専攻ゆえ、中国とイギリスの連関・比較を通してグローバル・ヒストリーを考えたとと思う。他地域が専門の研究者も参画した連関と比較で、各自のグローバル・ヒストリーを考え集大成すれば、まさにそれは「グローバル・ヒストリー」となるだろう。(2年・文III)

前回の講義(黒田先生)とも共通するが、歴史を学ぶとき「比較」は万能ではない。要素を絞り、比較をひとつの手段として全体を考えられれば、国境を越えておこる現代の諸問題をとらえやすくなるかもしれない。(1年・文I)





オランダ東インド会社史料マイクロフィルムを学生に回覧(島田先生)



講義終了後教壇にて(川島先生)



近世アジア間貿易とイギリス産業革命

銅から見るグローバル・ヒストリー

島田 竜登

第6回：2007年5月28日（月）

講義内容

オランダ東インド会社（VOC）文書を主に用いて、日本銅がアジア内三角貿易の一辺をなしていたという連関の歴史と、銅生産に関する日本とヨーロッパの比較の歴史について講義がなされた。そして、連関の歴史と比較の歴史を組み合わせた立体的なグローバル・ヒストリーが示された。

1. アジア間貿易とは

アジア間貿易とは Intra-Asian Trade の訳で、アジア域内交易とされることもある。アジア間貿易の研究は1980年代から進み、近世（18世紀まで）と近代（19世紀以降）に関する研究成果が積み重ねられてきた。

近世には中国人同士の市場にヨーロッパ人が参入し、アジア間貿易がいっそう活発になった。近代になると、アジア間貿易の成長率は、ヨーロッパとアジアとの貿易のそれを凌いだ。従来は近世と近代のアジア間貿易に関して連続説と断絶説が唱えられていたが、最近では再編説が主流となっている。

2. VOC 文書とは

オランダ東インド会社（VOC）文書は、オランダ国立公文書館に所蔵されており、17世紀から18世紀にかけてのアジア研究のための資料の宝庫となっている。また、インドネシア、スリランカ、インド、南アフリカなどにも伝来しており、2002年から資料保存の国際協力が進められ、世界記憶遺産（Memory of the World）に登録された。

3. 連関の歴史

日本銅は、長崎の出島を出た後にインドに向かい、インド内陸部で少額貨幣となった。インドからは綿布がタイへ輸出され、タイから日本へは鹿皮や鮫皮などが輸出された。アジア内三角貿易の中、VOCは日本銅の輸出に投資する形でアジア間貿易にかかわっていた。

VOCは、ヨーロッパから持ってきた銀をアジア間貿易に投資してそこから利ざやを稼ぎ、帰りの船でバタヴィアに寄って胡椒などを買い付け、その後ヨーロッパでそれらを売ることによって多大な利益を上げていた。1648年から1650年のアジア間貿易の利益率は年平均で61.3%あった。1701年から1702年において、VOCがインドで日本銅を販売することによって得た利益は、全販売利益の34.5%であった。アジア全体では、日本銅の販売利益は全販売利益の12.1%であった。VOCは、ヨーロッパから持ってきた銀で胡椒などを直

接買い付け、ヨーロッパで販売するイギリス東インド会社（EIC）とは対照的であった。

4. 比較の歴史

日本の銅生産は17世紀後半にピークを迎え、それ以後は下降した。一方、イギリスは1730年頃から生産量を増やし、EICによるヨーロッパ銅の輸出量は、18世紀半ばからVOCによる日本銅の輸出量を上回るようになった。これに合わせて、イギリス銅のアジア向けの輸出量も増えていった。

背景には、日本とイギリスの銅生産方式の違いがあった。日本の銅山では、銅の採掘と運搬そして洞窟内の排水にはヒューマン・パワーが用いられていた。対してイギリスでは、蒸気機関を用いて銅の運搬がなされていた。アジアでの銅需要がイギリスの産業革命を後押しし、産業革命によって銅の生産コストが下がり、イギリス銅が綿布に先立って産業革命のメッセンジャーとしてアジアに到来したといえるかもしれない。

5. 連関と比較の歴史の融合

イギリス銅のアジアへの輸出量が増えたのにもかかわらず、インドにおける日本銅の販売量は変わらなかった。その要因のひとつとして、市場の違いが挙げられる。99%純銅である日本銅は、銅の含有率がそれより低いイギリスの加工銅よりも小額貨幣の素材として選ばれ続けた。また、イギリス銅は単純に嗜好という点で選好されなかった。実際、日本銅のイミテーションを作ったところイギリス銅が売れ出したという報告記録がある。さらに、イギリス銅は日本銅に比べてそれ程価格が下がったわけではなかった。

日本銅は反グローバルイゼーションの象徴であったといえるかもしれない。つまり、ある財の価格が下がることによってその財が世界的に広がっていくことをグローバルイゼーションとすると、グローバルイゼーションの下では、日本銅は価格が安いイギリス銅にインド市場から駆逐されるはずである。ところが、日本銅は質・嗜好・価格の点で市場に選好され続けたのである。

質疑応答

Q：アジアにおける市場の違いとは具体的にどのようなものか。

A：日本銅は貨幣としての需要が高かった。一方、ヨ

ヨーロッパ銅は武器や一般商品を作る目的で買われていた。ただ、両者の用途に関しては完全には追えない。

Q：オランダ東インド会社とイギリス東インド会社との間で、アジア間貿易における投資の仕方の差が出たのはなぜか。

A：オランダの場合は軍事力を背景として会社がアジア間貿易に投資し、イギリスの場合は自由貿易商人

がオランダの合間をぬってアジア間貿易に投資した。

Q：大陸東南アジアからの貿易総額は三角貿易を成立させるほどのものなのか。

A：案外そうかもしれない。鹿皮や鮫皮は当時の日本では高値で取引されていた。（文責：畑中）

授業アンケートから

高校の世界史では、銀に着目したテーマはあっても銅についてはほとんど触れられていなかったのが新鮮でした。また、イギリスの産業革命を示すものはインドへの綿布だと習っていたので、それより少し早い銅が産業革命のメッセンジャーだという提案はとても面白いと思いました。（1年・文I）

グローバリゼーションと反グローバリゼーションの動きを日本とヨーロッパの銅の流れから解説して頂き、具体的に資料データもありわかりやすかったのですが、そこからどうグローバル・ヒストリーにつながるのかがわからなかった。しかし、様々なモノの流れを捉えていくことは興味深いと思う。（1年・文I）

「連関」と「比較」、この2つの方法が論点を非常にクリアにしており、グラフが様々な観点で示されていたため、とても興味深くお話を伺うことができました。資料の扱い方という面でも勉強になる講義でした。（1年・文III）

私は日本史も学んできましたが、こういった形で日本と世界のかかわりを知ることができると、より理解が深まってきます。“連関+比較=>グローバルな歴史”という手法は歴史を考える中で重要だと思いました。（文I）

オランダ東インド会社の資料だけでこれだけ新しい発見を得ることができるのなら、イギリス東インド会社などの資料を用いれば、資料同士の比較・対照ができ、新たな発見もできるように思いました。（1年・文I）

日本銅とイギリス銅の違いが性質や用途にとどまらず、採掘等のエネルギーまで違うとは知らなかった。（1年・文I）

「貿易」ということが、一番グローバル・ヒストリーの具体例として思い浮かびやすいテーマです。（1年・文III）



世界システム論からグローバル・ヒストリーへ

山下 範久

第7回：2007年6月4日（月）

講義内容

世界システム論を出発点として歴史と現在をいかに接続すべきだろうか。世界システム論は誕生から30年が過ぎたが、そのオーバーホールとしてグローバル・ヒストリーの方法が有効かもしれない。

1. 時間への関心と空間への関心

時間や空間を鍵に中国・東アジア史を研究した宮崎市定は、1950年に刊行された『東洋的近世』の冒頭にひとつの年表を掲げた。それは縦の3区分に「東洋・西アジア・ヨーロッパ」を配し、それぞれが「古代・中世・近世・最近世」の帯に分かれている。一見すると、この「年表」には、事件のレベルではほとんどなんの情報も含まないが、事件のあいだの関係を定める時間的・空間的枠組みのレベルでは強い主張を純粋に表現したものとなっている。この区分法や「帯」の描きかたは絶対的なものではない。様々な可能性からあるひとつを選択することで可能になる、歴史の記述が存在するということだ。

2. 「メタヒストリー」とはなにか

メタヒストリーとは「歴史の歴史」、つまり、歴史家のいる現在と記述される過去との関係性の不断の変化に注目する方法である。今回は歴史を「異なる時間間の関係について、何らかの一貫した語りを提示すること」と定義する。メタヒストリーが意識されたのは近代以降であり、異時点間の差異と同定には関心が集まったが、国民国家が空間を規定したので、異地点間に関するそれは低下した。しかし国民国家が歴史的構築物であるとするれば、私たちは歴史を書く際、時間のみならず「空間のユニット」も考えるべきだ。その嚆矢として世界システム論を位置づけられないか。

3. 世界システム論の史的意義

世界システム論は、空間的な連続・不連続を、時間的連続・不連続とあわせて再度モデル化する試みといえる。16世紀欧州に発する「近代世界システム」が世界を包摂したという考えは、非ヨーロッパの主体性を認めなかったが、70年代に東西イデオロギー対立に隠れた地球規模での南北格差を主張したことに意義がある。

4. グローバル・ヒストリーの試み

グローバル・ヒストリーは近世に着目し、ヨーロッパ・非ヨーロッパ間の連続性を強調する。どれほどのタイムスパンで歴史を捉えるかで、歴史の見方は大きく変わる。「グローバルな近世性」を世界各地に見出

し、続く近代を「各近世性間のインタラクション」として考察できる。

たとえば、いわゆる「長い16世紀」において、ヨーロッパは交通の発展のなかから資本主義的な世界=経済をつくりだしたとされている。しかし、この世界システム論的な見方はグローバル・ヒストリーの立場からこう批判しうる。つまり、「長い16世紀」における交通の拡大はグローバルにおこったことであり、その過程から生じた地域的空間秩序の凝集はヨーロッパだけにおこったことではなく、グローバルかつパラレルな現象であった。近世のヨーロッパ地域システムは、たとえばオスマン帝国やムガル帝国の発展と並行しており（その意味でヨーロッパの地域秩序もまた帝國的であり）、これが19世紀にいたるまで、グローバリティを安定的に分節化するモードとなった。

19世紀以降、国民国家システムによって分節化されたグローバリティは、安定的な空間秩序を失ったポスト（近世）帝国の時代における「まにあわせの秩序」といえるかもしれない。それは、世界システム論が想定してきたように近世のヨーロッパにできあがった非帝國的なシステムの拡大延長ではなく、むしろそれに先行した秩序の流動化期であるグローバルな「長い16世紀」に類すべきかもしれない。われわれは、いわば「長い20世紀」の最終局面を生きているのかもしれない。

5. おわりに

時間と空間の枠組みを見直すことで、以上のごとく歴史の見方は相対化・転換しうることを本講義では述べてきた。

世界システム論は、歴史記述の時間の枠組みの明示性に反省を促した。歴史分析のポジティブな枠組みとしては、それはすでに歴史的な使命を終えたと言っていいであろう。グローバル・ヒストリーは、むしろ世界システム論が果たした批判的な運動としての役割を更新して引き継ぐところに意義がある。「運動としてのグローバル・ヒストリー」は、閉じた史的システムを、より広い空間的文脈に再び開いていくはたらきの、ひとつにすぎない。しかしそれゆえに、グローバル・ヒストリーは、多元的な知的アプローチを可能にするのである。

質疑応答

Q：世界を一体的にみるグローバル・ヒストリーは、国民国家史的システムを無意味化するものなのか？

A：グローバル・ヒストリーはあくまでも試みだ。グローバル化がすべての現象で世界の一体化に向かうとは限らない。華僑史が台頭したように、「史的システムの切りとりかた」を変えることで、国民国家史を相対化できる可能性に注目すべきだ。

Q：中国人が古来「中国史」を書いていたことは、どう理解するか？

A：「Nation」と「State」は別物だ。自らの世界観の中で世界を描くことと、19世紀以降の国民国家シス

テムを前提にした「世界史」は違う。そもそも、後者の史的システムが、他のシステムを可能性から排除していることを批判したい。

Q：「長い20世紀」の後に来るといふ「新しい帝国」は、単数形あるいは複数形のどちらで現れるのか？

A：同時代性の点では単数形だが、地域性や多数性を考えると、複数形だろう。（文責：浦田）

授業アンケートから

これからの世界システムについて興味をもった。人々が価値基準の単位で複数現れるのであれば、それは安定ではなく対立や競争が生まれるのではないか。(1年・文Ⅰ)

歴史の解釈方法が時代の世相を反映して変化してきたことを再認識した。グローバル・ヒストリーの視点を違和感なく受け入れることができるが、それすらも現在世間で頻りに語られる「グローバル・ヒストリーの視点」を無批判に受容しているだけかもしれない。(1年・文Ⅲ)

概念によって簡略化することは、恣意的に事物を取捨選択することでもある。世界システム論にも見えるものと見えないものがあるはずだ。それでも、その枠組みで歴史を見直すのは面白いし、見かたを変えてくれる取り組みであらう。(1年・文Ⅲ)

大学の研究キーワードは「相対化」なのだろうか。歴史の描きかたはどれも正しいものでないなら、研究によって答えはいつもみつからず、熱意が削がれそうな気がする。大学の先生方はどのような意識で研究に打ち込んでいるのだろうか。(1年・文Ⅰ)

グローバル・ヒストリーをパラダイム転換ではなく、一つのチャンスと考える方法は新鮮だった。(2年・文Ⅲ)

ヒストリーは、自然科学ではないから数式で分析できない。人間がやってきたことすべてを考えるからこそ捉え方は無数にあるのだろう。だから、歴史を見る目が宗教・国別のものから史的システム論、グローバル・ヒストリーまでシフトしてきたのは必至だったと思う。(1年・理Ⅱ)



アジア都市は近代都市計画をいかに受け入れたか

インフォーマル都市の生成と再生

城所 哲夫

第8回：2007年6月11日（月）

講義内容

まず19世紀以降の都市計画の歴史を素描し、近代都市計画がどのような理念の上に成立してきたのかが説明された。次に、その都市計画がアジア都市で受容される過程で、いかにしてインフォーマル都市が生まれてきたのかが示された。そして最後に、インフォーマル都市が現在どのように再生されようとしているのかについての事例が紹介された。

1. 都市計画の歴史

都市は、たくさんの人が集まって物と知識が交換・創造される場である。そのため、都市空間を構成するためには、いかに規模・密度・多様性を確保するかが重要になる。近代都市計画は、「指令と制御 (command and control)」によってこれらを確保しようとするものであった。この背景には、19世紀半ばのイギリスの都市化問題があった。

産業革命後のイギリスでは、農村から都市への人口移動が進んだ結果として都市が過密化した。これにより、都市に住む労働者の劣悪な生活環境が社会問題となった。また、都市の無秩序な拡大によって田園の破壊が進んでいた。そこで、インフラストラクチャーの整備をしたり土地利用の規制をしたりして、都市化を「制御」するための制度として近代都市計画が生まれたのである。

しかし1960年代からは、「指令と制御」による都市計画に代わって、新しく人間らしい都市計画が提案されるようになった。情報革命によって空間のバーチャル化や匿名化が進んだことに対して反省が促されたからである。現代都市計画では、親密で多様性を持つ空間を再生することが目指されている。持続可能な発展という観点から、自然再生を「支援」することもテーマとなっている。

2. 近代都市計画の理念

近代都市計画は4つの理念から成り立っている。1つ目は、田園都市である。この理念は、中核都市の周囲に郊外都市としての田園都市を作ることによって都市の緊密化と田園破壊という問題を解決することを目指していた。

2つ目は、ゾーニングである。ゾーニングは、住宅地や工場用地などといった小単位地区に土地を分けて、多様性を確保することを目指している。具体例としては、1916年のニューヨーク・ゾーニング条例が挙げ

られる。

3つ目は、過密への対応としてのタワー・アンド・スペースである。ル・コルビジエが『300万人の都市』(1922年)で提起したこの理念は、建物を高層化することによって、田園に行かなくても周りに自然のための十分なスペースをとることができるという発想に基づいている。ニューヨークのマンハッタンが1つの例となっている。

最後の4つ目は、交通ネットワーク+グリーンベルトである。これは、市街地を既成市街地として過密化を抑制すると同時に衛星都市によって人口分散を図り、鉄道や道路で既成市街地と衛星都市を結び、そして既成市街地と衛星都市の間を緑地帯で囲むことを理想とするものである。1944年の大ロンドン計画や1947年のコペンハーゲンにおけるフィンガー・プランがこの理念を代表している。

3. インフォーマル都市の生成

日本では1919年に都市計画法が制定されたが、部分的な計画に留まった。とりわけ1923年の関東大震災の後、都市化計画は人の移動に伴って郊外を中心になされた。そして、都内の非計画地が木造老朽密集市街地となった。計画されなかった地域にインフォーマル都市が生まれてくることになったが、近代都市計画の諸理念が適用された地域でもインフォーマル都市が形成されていった。

ゾーニングは、植民地であったバタヴィアに適用された結果として植民者と現地住民の分離を生み出した。そして、後者の地区に密集市街地が形成された。またマニラでは、ゾーニングによって社会階層間の分離がもたらされた。貧困層は不法占拠地区でスラムを形成している。

都市の郊外化は、無秩序な拡大つまりスプロール現象を生み出した。例えば、田園調布や多摩ニュータウンのように計画された田園都市がある一方で、高松やアフガニスタンのカブールのようなスプロール市街地が形成されていった。

さらにタワー・アンド・スペースに目を向けると、建物を高層化したからといって必ずしも理念どおりにスペースができるわけではなかった。それは、東京やタイのバンコクを見れば明らかだろう。タワーとタワーとの間にできたスペースは、インフォーマルな都市空間で埋められることになる。

最後にグリーンベルトに関しては、韓国がこの理念をうまく実現させたといえる。ただしこの成功は、理念そのものよりも、防衛上の理由と風水思想の影響によるところが大きい。一方、東京では、1958年の首都圏整備計画のもとで、グリーンベルトを設定して市街地の拡大を抑制することが試みられた。しかし、近郊地帯の土地所有者による反対などの理由から、グリーンベルト計画は成功しなかった。そして、高度成長期にスプロール市街地が形成されていった。

4. インフォーマル都市の「発見」と再生

都市計画規制の空白領域にインフォーマル都市が形成されていった。しかしこれは、フォーマル都市の方がインフォーマル都市よりも良いことを意味するわけではない。フォーマルな都市空間は、そのテーマ・パーク化が進むなかで、心地よいが均質的で擬似的だとみなされるようになりつつある。

一方でインフォーマル都市は、インフォーマルであるが故に、他のどこにもない「本物」の、そして魅力的で親密な空間として見直されてきている。

例えば、月島の路地空間やマニラのスラム・コミュニティに人と人との親密性が求められ、そのような親密性を持つ都市空間は、最近のテレビや雑誌などでも再「発見」されている。また、パキスタンのカラチに

あるオランギ地区では、住民によるエンパワーメントが推進され、住民自らの力で住環境を改善し、社会的ネットワークを強化していく試みがなされている。

質疑応答

Q：インフォーマルな空間に親密性があるのか。

A：必ずしもあるわけではない。人と人との関係は親密だが、社会全体としてのコミュニティが成立しているわけではない。ただし、そうであるからといってコミュニティを強くしていくと、多様性が失われることになる。

Q：都市計画は今後どうなるのか。

A：「制御」から「支援」へというのが最近の流れである。例えば、横浜には、NPO、住民、あるいは自治体の関係者の合意に基づいて「町づくり」計画を立案し、その実行のために市がその計画に補助金を出すという制度がある。一方で、ショッピングモールの進出によって商店街が廃れてきている現状から、土地利用に対する規制の強化も必要だと考えられつつある。

(文責：畑中)



授業アンケートから

インフォーマル都市にこそ本当の価値が内在しているという話は面白かった。でも、インフォーマル都市にも問題があることは事実で、それを「本当」と感じられるのは外側の視点なのではないだろうか。内側の視点・そこで生きている人たちの視点が欲しいと思いました。(1年・文I)

ミッドタウンなどテーマパーク的都市開発は現在も続く一方、下町や下北沢などの人のつながりの特徴とする町が注目されている。そこにはリアルに渴いている現代人の姿が見える。どこにでもコンビニ、量販店、チェーン店などがあり、類似した空間があふれる中で、人々は自分で街づくりをし始めているのかな、と話を聞いて思った。(2年・文II)

どちらかという引き籠りがちなほうである私としては、フォーマルな都市はとても居心地のいいものである。(2年・理II)

私の出身高校の所在地である文京区茗荷谷近辺のような、道が狭く坂も多い、家屋が密集している、とても「計画的」とはいえないけれど、生活感溢れた居心地の良い町を残していくにはどうすればいいのか、と考えさせられました。(1年・文I)

私はつくば市に住んでおり、今まさに開発が進められている。それを見ていると、都市を作るのは難しいものだと感じざるを得ない。利便性、安全性、環境面への配慮、エンターテインメント性、ユニバーサルデザイン…様々な切り口があり、そしてどれも必要とされているものだ。その融合とバランスが難しいようである。(1年・文III)

時代、文化、地域などの違いによって都市の形態は様々に変化してきており、これからも変化していくのだろう。逆に言えば、都市の形態を詳細に研究することは、グローバル・ヒストリーを解き明かす1つの方法となり得るのではないだろうか。(1年・文I)



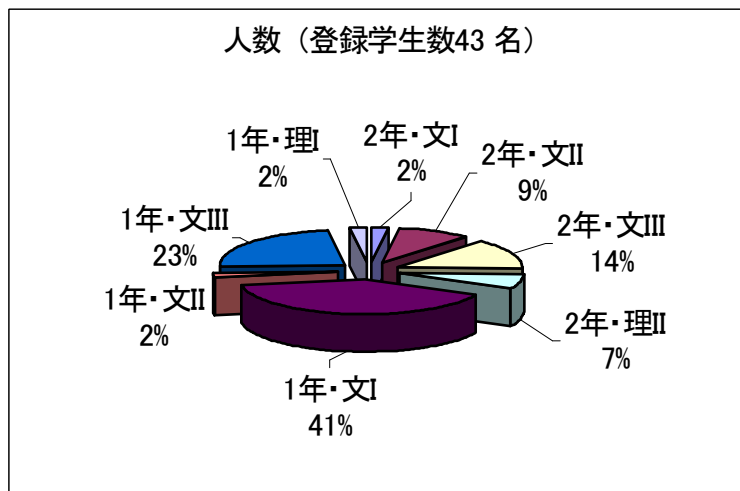
Photo : SHIBUYA Yuki ベトナム、中部高原の街並み



質疑応答



講義風景。登録学生 43 名、出席者数平均 45 名程度であった。



変動するアジアの自然環境：その現在・過去・未来

須貝 俊彦

第9回：2007年6月18日(月)

講義内容

近年、「人間の歴史」が「自然の歴史」に影響するようになってきた。地球上のあらゆることは世界規模の自然変動に左右されている。「過去の歴史データ」を参照し未来を予測するとき、先進国にデータが偏っているのは問題である。本講義はとくにアジアの人と自然の歴史を振り返る。

1. 現在の姿をとらえる：ダイナミックに変化するアジアの自然環境

アジア地理の特色は、ダイナミックな地理景観の変化と生物の多様性・集中性である。

ユーラシア大陸と海域の比熱差は、両地域間モンスーンの原因となっている。モンスーン地帯では、水の循環量が他に比べ極端に大きい。河川経由で多くの水が海洋に向かい、大量の土砂が運搬されるため、大河の河口には巨大デルタが形成され、肥沃な土壌と広大な平地が大量の人間を養う。季節風により大気中をも土砂は移動する。黄砂のように陸の無機塩類を多く含む場合、それが海を育てることになる。

土砂移動量が多いほど、モンスーンアジアでは人口密度は高い。年間降水量500ミリ以上が畑作地帯、1000ミリを超えると稲作に変化するようになり、気候が人間の生活状況に深く関係している。

2. 過去の変動を復元する

地球の歴史で現在は第四期にあたる。第四期内の氷期・間氷期サイクル(約10万年周期)が、人間の歴史に大きな影響を及ぼしてきた。

人間と自然の歴史を三段階に分けると、(1)人間が自然に翻弄される時代、(2)文明が発達していく時代=人間が自然から奪う時代、(3)自然に対し人間が影響を与える時代(直近の1世紀)、となる。

人類の拡散時期は、気候変動と関係している。アフリカで森林が草原化した400万年前、二足歩行を始め、脳容積が拡大した。氷期だった4万年前と1.5万年前に、陸化した海を渡って人類はオーストラリア大陸、アメリカ大陸へ進んだ。

中山道の旧宿場町・大湫盆地のボーリング調査では、地層内の花粉量・種類を分類し、過去の気候を復元し(ベストモダンアナログ法)、2万年周期変動が発見された。大湫の乾燥(泥炭湿地)期には黄河流域が湿潤(森林)期、逆に湖の底だった時代には中国は乾燥期、という相関が見出された。

3. 文明の発達と地球気候の変化

動物の家畜化や植物栽培の多くはアジアで始まった。稲作は長江下流から、麦作は中東から拡大し、とくに後者のヨーロッパ拡大は放射性炭素同位体測定法によりその時期が判明している。日本の関東平野では、縄文海進期の貝塚分布調査により、豊かな狩猟採集生活が存在したことが知られている。

縄文期の世界的な海面上昇が現在の水面位置に戻ったのは、7000年前とされる。その約110年後に都市が発達した。沖積低地や干潟、浅海域の高い生産性が、人口爆発を保障していたからである。

4. 人間活動による自然の変動を見極める

20世紀は人類による環境改変の時代だった。人類の居住域は拡大したが、従来は単なる自然現象とされたものが「災害」化し、排気ガスなどの排出物が大気・海洋循環にとりこまれて気候に影響した。

これらの影響はグローバルな面とローカルな面で違えることがある。地球温暖化により、低緯度地域で農業生産性が低下するが、従来農耕不可だった寒冷地が農地化されるのは、その一例である。

未来の環境予測には常にグローバル・ローカル双方を注視する必要がある。海面上昇が世界的であっても、大河川の土砂運搬がそれをカバーする地域もあるだろうし、海洋循環リズムの変調で、逆に寒冷化する地域もでてくるかもしれない。

質疑応答

Q：大湫盆地の高水位時代に、逆に黄河流域では乾燥していた、とはどういう仕組みなのか。

A：詳細は不明である。水収支に蒸発散量や気温が関係していることを考えれば、気候変化に世界一律的な気温変化が加わるなかで、むしろ地域的にはその影響の出方が異なってくる、という概念が有効だと思われる。

Q：地球史的な気候変化を扱う今回の科学的手法を、もっと短期的で有史以来の気候変化把握に導入できるのか？

A：文書上の気候変化に関する記述(たとえば、14世紀のテムズ川結氷の記事)は、かなり有用である。しかし、文字資料不在の時代・地域に関しては長期的な変動しかわからない。

Q : 現在の世界的な気温上昇のなかで、東京が他都市よりも温度上昇度が高い理由は何か?
A : グローバルな気温変化とその地域的影響の関係は、

依然研究が進んでいない分野である。(文責：浦田)

授業アンケートから

大きなスパンで環境問題についての話を聞けて刺激的だった。人類がまとまって立ち向かうべき課題だけに、その先頭に立つ僕らは、メディアの知識だけでなく様々な視点から学ばないといけない、と強く再認識した。(1年・文Ⅰ)

気温変化や水面上昇など、人間と自然環境の関係はとても密接で、双方を切り離して人間の歴史は考えられないと思う。歴史学の発展には、(自然)科学的な調査も欠かせないとあらためて思った。(1年・文Ⅲ)

一般の歴史学は言葉や意識、社会に限定して語られる。気候や病気といった、実際には大きな影響を与えたものが無視して語られることに、いままで窮屈な印象をもっていた。20万年周期変動の話は歴史学にとっては大きすぎるが、気候と歴史が、たとえば2000年単位くらいでなにか相関しているのか、興味をもった。(1年・理Ⅲ)

単純に地球温暖化を警告するのではなく、過去を綿密に分析したうえで初めて将来を考える姿勢が印象的だ。過去から周期的に起こる事象も多くあり、一方で急激な変化もあることを考えると、両者をどう考察するのか、さらに知りたい。(1年・文Ⅰ)

「46億年の地球史」は、これ以上ないグローバル・ヒストリーの視野だろう。しかし、いま求められるのはそのような回帰主義的な歴史的視点ではなく、それを用いて「先を見つめる」ものではないか。この意味では、グローバル・ヒストリー概念との関連に疑問を残した。(1年・文Ⅰ)

黄砂など、東アジアの地理的特殊性を考慮に入れることで、歴史学におけるグローバル・ヒストリーの挑戦もさらに進むと思った。グローバル・ヒストリーが考える学問分野は、とても広いと感じた。(2年・文Ⅲ)



生物資源と人類の 100 年：1950-2050

川島 博之

第 10 回：2007 年 6 月 25 日（月）

講義内容

食糧問題を題材としてグローバル・ヒストリーを論じる 1 つの試みがなされた。とりわけ、レスター・ブラウンの食糧危機論を、耕地面積の増減、穀物一人当たりの生産量、食肉生産と飼料との関係という 3 つの点から批判する形で講義がなされた。

1. 森林と農地の割合

南極とグリーンランドを除いて、世界には 130 億 ha の土地がある。そしてその土地は、耕地 11.9%、森林 32.2%、草地 26.5%、その他（砂漠、ツンドラなど）29.3%で構成されている。ただし、森林の定義が曖昧なため、この数字は絶対的なものとはいえない。付言するなら、その曖昧さは森林破壊の実態に恣意性を持ち込むことになる。というのも、森林とされているところが、実質的には草地とみなしたほうがよい土地である可能性があるからである。

また、地域ごとに土地利用の割合に差がある。東アジアは、耕地 14.4%、森林 15.9%、草地 46.2%である。南アジアは、耕地 49.1%、森林 20.5%、草地 4.7%である。西ヨーロッパは、耕地 30.3%、森林 25.0%、草地 24.5%である。南米は、耕地 6.9%、森林 53.0%、草地 26.5%である。これら 4 つの地域を比較したとき、南米の耕地面積の割合の低さと森林面積の割合の高さが目に付く。グローバル・ヒストリーという観点からすると、地域によって歴史の深さが異なり、それが耕地面積の差として現れたといえるかもしれない。

2. 耕地面積の増減と食糧危機論

レスター・ブラウンが食糧危機論を唱えているが、これはどのくらい妥当なのか。3 つの点からみていく。第 1 に、世界の耕地面積の増減をみると、1961 年を基準年として、世界全体の耕地面積は現在 20%増えている。とりわけ、オーストラリアとニュージーランドにおいて耕地面積は、穀物価格による増減がこれまであるものの、約 3 倍に増えている。他に、東南アジア、南米、西アフリカでも増えている。逆に、ヨーロッパと旧ソ連では減っている。ちなみに日本では、住宅地と農地との割合が 1 対 20 になっている。

第 2 に、小麦・米・トウモロコシといった穀物の一人当たりの生産量をみると、1961 年に比べて生産量は増えている。この背景には、単収つまり単位収穫あたりに取れる穀物の量の伸びがある。例えばフランスをみると、19 世紀から 20 世紀前半までは、1ha 当たり 1t 前後の単収であった。ところが、空気中の窒素を固めた化学肥料を用いることによって、単収は 1950 年

から急激に伸びた。このいわゆる緑の革命によって、現在では 1ha 当たり 8t に迫っている。他の先進国でも緑の革命は進んだ。

そして第 3 に、食肉生産と飼料との関係を見る。肉生産量は 1961 年から 4 倍近く伸び、一人当たりの肉生産量も約 25kg から約 40kg に増えた。肉生産量を種類別にみると、牛や羊などは以前と大きく変わっていない。ところが、豚と鶏の生産量が増加した。このことは家畜に食べさせる飼料の増大を意味している。特に、鶏に 40 日間飼料を与え続けてから屠殺するプロイラー技術は、飼料の需要を高めている。現在、穀物生産総量の約 3 割にあたる 8 億 t が飼料用となっている。

以上から、ブラウンの食糧危機説は誤りであるといえるだろう。特に、穀物需要の増加は鶏肉生産のためである点を考えなければならない。

3. グローバル・ヒストリーとの関連

昔は「食べること」が歴史の中心だったといえる。ところが、緑の革命をきっかけとして、先進国においては単収の増加によって食糧問題が改善した。また、農業生産が全生産に占める割合は、国民一人当たりの GDP 増加に伴い低下した。これらが政治の変化につながったといえるだろう。

世界の農民人口は現在 25 億人であるが、その 8 割はアジアに存在する。アジアには農民人口比率が 50% 以上の国が多い。一方、先進国では農民は人口の 2~3% だけである。今後はアジアでも、単収の増加とロボットの導入とで農民人口がさらに少なくなる可能性がある。

農業と開発の点でサブ・サハラは、その発展可能性にもかかわらず成功していない。人口は 50 年前の 3 倍、50 年後には 2 倍になるだろうといわれる地域で今後どうすべきか。大きな課題である。

質疑応答

Q: ベトナムなどの農業はアメリカに対抗できないが、今後どうなると思うか。

A: 日本円に換算して 1 ha から 10 万円あげるのが平均である。アメリカは一人当たり 100ha 所有し、東南アジアでは一家族で 1 町である。もしヴェトナムの農家が年収 10 万円で満足するなら農業を続けるだろう。ただし、農業開発によって年収が上がることはないだろう。

Q：サブ・サハラではどうすればよいか。

A：資源は多いが適切に使われていないことが問題である。ただし、これは農業の問題ではなく政治の問題である。政府の腐敗、部族間対立、モスLEMと非モスLEMの敵対関係といった問題が解決されなければならない。もし内戦や汚職がなくなれば、中国と

インドのような開発の軌道に乗るだろう。

Q：開発の軌道に乗れば森林破壊が進む。すると、開発 vs 自然破壊の価値対立が起こるのではないか。

A：そのとおりだと思う。似たようなことは今、ブラジルで起きている。(文責：畑中)

授業アンケートから

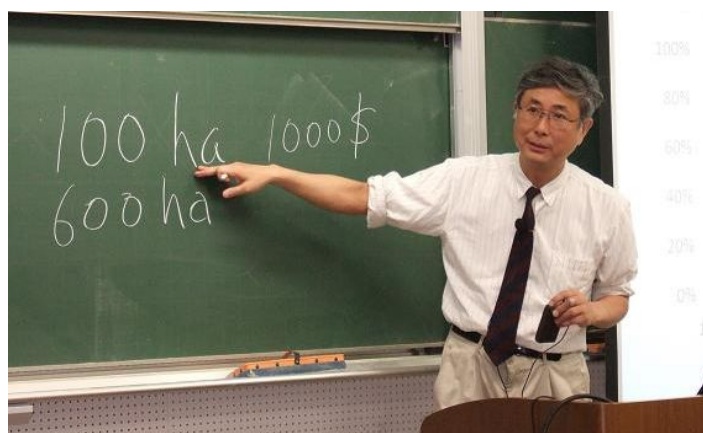
ひとつ気になったことがある。エネルギーの問題である。確かに生産率は伸びた。しかし、それを支えているのは化学肥料や機械で、それらにはエネルギーが必要だ。輸送コストはかからないかもしれないが、輸送のエネルギーはかかる。エネルギーが有限であることを考えると、そう楽観的にいつまでも生産率が世界中で伸びるとは思えない。(1年・文I)

農地・農業から世界を見る、歴史を見出すというのは斬新だと感じた。最後にあったベトナムの農民の話が非常に面白かった。「貧しい農民に稼がせてあげたい」という思いが私の中のどこかにあるような気がする。ところが、農業をやらせても損になる、過去の日本がそうである、と言われてはっとした。(1年・文III)

「人口が急増する中、世界では食料需要が高まって、このままだと食糧不足になる」と思い込んでいたので、肉の生産量が高まっていて、そのような見解は必ずしも正確なものでないことが意外でした。また、日本の食料自給率が低いことは有名ですが、戦争などで食糧自給率が低いことが不利につながらないと考えられる今、わざわざ高めようとする必要がないという意見は斬新でした。でも私は、日本がいったい農業を放棄するということまでは賛成しかねます。これから自給率を上げる必要は無くても、すべてを輸入に頼るのは、万が一輸入国に何かあった場合など、不安な要素が多いと思います。(1年・文III)

歴史の長いところは耕地を広げているから、耕地の分布を世界地図上に広げると、人類がどこで何をやってきたのかがわかるというのは興味深い。歴史の浅いところでは耕地にできる森林がまだ残っており、未開発の部分を開発するか、地球温暖化に歯止めをかけるために自然を保護するかというのは、人類がこれからどういう方向に進むかに大きく左右されるだろう。(1年・文I)

生産性の向上、食糧危機のまやかし、食肉生産の変化など、興味深い話でした。アジアに大量の農民がいることと、最先端の技術が導入されれば農業人口を減らさざるを得ないことを合わせて考えると、一般的な「国家が豊かになる過程」にアジア諸国が乗っていくのかと思えて少し楽しかった。「これからのグローバル・ヒストリーはアジアのものとなる」との言葉が印象深い。(2年・文II)



湖の堆積物に中国王朝の歴史を読む：地質学者の目

松本 良

第11回：2007年7月2日(月)

講義内容

1. イントロダクション

湖成層研究は、近年の地質学で注目を集める分野だ。湖の堆積物により、過去の連続的な記録を高分解能で分析できるからだ。本講義では、中国・チベット自治区にある西海湖の湖成層研究の事例を用いつつ、気温変化と人間活動の関連を述べる。

2. 文明の発達・社会の発展の原因は、温暖化か寒冷化か

過去40万年間、気温変動には大きな4つのヤマがあったが、最近6000年間は比較的变化が少なく、間氷期とされる。この6000年間みられた人類の発展に、いかに温暖な気候が貢献したか考察したのが、1973年のChu Ko-Chen論文である。1万年前からのノルウェーの万年雪分析の結果と、中国における気温変化のデータは一致しているという。とりわけ、隋唐期は温暖だったことがわかり、Chuは「温暖な気候は、文明を進展させる」と結論づけた。

3. 事例：西海湖底のボーリング調査結果から

松本先生は、南京・地理湖沼研究所との共同研究で西海湖底のボーリング調査を続けている。浅い湖底から最大10mの地層をとりだし、5-10mm単位でサンプルを採出すると、5万年前までのデータが得られる場合すらある。夏冬の堆積物の違いによる色相分析と放射性炭素同位体(C14)分析を組み合わせることで、年次ごとの変化がわかる。さらに、C13測定からは生物生産性や種類が特定され、地層内の花粉分析も気候の復元に役立つ。

それによると、1.4-1.2万年前は含有酸素量が少なく、寒冷で乾燥した時代だったことがわかり、続く7500年前までは湿潤多雨の温暖な時代、それ以降は寒冷・乾燥の生物生産性が低い時代に移行したことがわかった。

ちなみに、別の研究では深さ100mまで氷層をボーリングしている。水中ダスト(石英の微粒子が大半)の解析で得られた4万年前までのデータによれば、最も寒冷なのが2万年前(ダストが多い)、1万年前を境に急激に温暖化が進んだという。

4. 気温上昇と文明の発展の関係

約1万年前に寒冷な新ドリアス期を終え、7-6000年前の温暖なヒプシサーマル期を経たころから、LGM(Last Glacial Maximum)期の影響は完全に消え、地球は温暖期に入った。ただし、これ以降の時代にも小

規模な気温変化があり、文明の成長と関連していることがわかる。

第一の小氷期(T1)は身分差が明確になりだした時代(約5000年前)、つぎの小氷期(T2)には寒冷な気候に対応して、古代エジプト文明など、より効率的な中央集権が誕生した。紀元前後の第三の小氷期(T3)は「精神革命」期とも呼べるものであり、地中海文明では農耕や牧畜に変化がみられた。直近の小氷期(T4)には、農業生産の低下によりヨーロッパ・イスラム文明が停滞するなか、宗教改革や科学革命が起こった。

ちなみに、小泉格論文「気候変動と文明の盛衰」においても、ヘマタイト(赤鉄鉱)やC14分析による太陽活動の変化を復元することで、同様の関心が追及されている。

5. まとめ

人類は気候に翻弄されてきたのか、あるいはその変化に対応することこそ、画期的な知恵や技術の契機だったのか。この疑問には、人類の歴史カレンダーと気候変動の経過を組み合わせることで、より答えやすくなるだろう。

ひろくサイエンス(科学)とは、まったく違う分野から知恵を援用するものである。地球気候変動の研究からも、本講義で示したように、文化人類学や歴史学への貢献ができるだろう。

質疑応答

Q：環境破壊や資源減少に対する立場は。

A：従来の概念分野、たとえば地球圏に加えて、「人間圏」という言葉が必要なくらい、人間の環境に対するインパクトが強くなってきた。たとえば、ヨーロッパの湖の分析では、産業革命以降の地層から、重金属(鉛など)が飛躍的に多く検出される。一方で近年の地層では、法の規制を反映して重金属が少ないのだ。

Q：「3：気温上昇と文明の発展の関係」によると、十字軍やバイキングなど、ヨーロッパの特殊なイベントを地球環境と関連づけている。「地球全体の気候変動」を「ヨーロッパ」という一地域に結びつける、積極的な理由はあるのか？

A：放射性炭素同位体の時代変化は世界共通でも、その影響の出かたには地域性がある。空間を意識した地質学的な環境の復元が、地質学者の課題である。

Q：氷中ダストの多寡は地域条件(風)を強く反映すると思われるが、地球全体の気候変化とどう関連しているのか。

A：ダストは、偏西風のように全地球的な空気流動を反映すると考えられている。ダスト量は、定量的ではないが定性的な気候変動をかなり正確に知れるとあって、近年注目されている。

Q：本講義と「人類史をグローバルにみる」というグ

ローバル・ヒストリーの立場を考える時、自然科学の側で人文歴史との関連を考えることはあるのか？

A：地質学の方法では100年-1000年単位での分析が中心で、それ以下の単位で考察できるのはかなり幸運な場合のみだ(分解能の問題)。ただし、技術の進歩により、本講義のように西海湖の研究で中国王朝の歴史の考察も可能になりつつある。(文責:浦田)

授業アンケートから

いままで歴史というものは人が築きあげていくものだと考えていたが、その当時の気候というのも人類史に少なくない影響を与えていると気づいた。(2年・文Ⅲ)

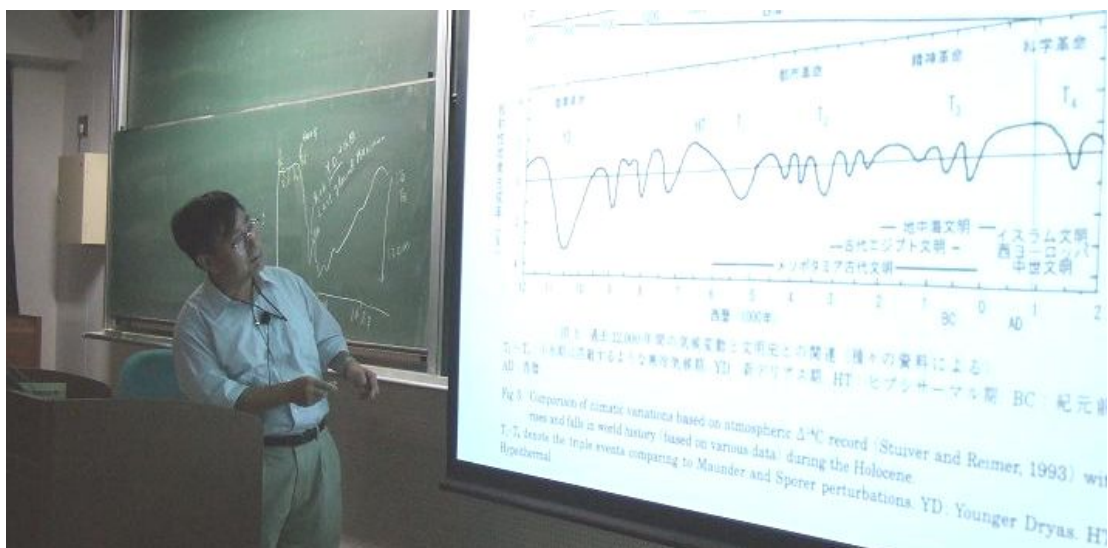
現代の人間は気候を順応する対象から、従属させる対象に大きく変えてきたと思う。そう考えると、いま起きている様々な環境問題、たとえば地球温暖化が、ものすごくインパクトあるものだと改めて気づいた。(1年・文Ⅰ)

10万年サイクルの気温の「山」がいま来ていると知った。すると、現在の地球温暖化は寒冷化を打ち消すのだろうか。文献史的な描きかたによる南北対立や格差の論題を吹き飛ばすようなスケールの大きい話が聞けてよかった。(1年・文Ⅲ)

小氷期における文明発達の話を読み、人類の環境適応的な行動に驚いた。すると現代においても、破壊されていく環境に私たちが生活様式を適応させることで、持続可能な発展を実現することは不可能ではないかもしれない。(1年・文Ⅲ)

文明の発達や社会の発展は気温が高いときに起きるのか寒いときなのか、という問題提起に興味深かった。当然のように温暖期に発展すると思っていたからだ。しかし、今回の講義で一概にそうとはいえないと知り、驚いた。(1年・文Ⅰ)

歴史を考えるのにサイエンスが有効なように、逆もまた有効な手段だと思った。学問は関連しているし、見方を変えたいならば違う切り口で攻めることもできるのだと感心する。そもそも歴史やサイエンスは世界を知るための手段に過ぎず、学問というものはもっと大きな問いを用意しているのではないかと一連の理系の先生方の講義で感じた。(1年・文Ⅲ)



アジア国際秩序とイギリス帝国、ヘゲモニー

秋田 茂

第12回：2007年7月9日（月）

講義内容

本講義では、世紀転換期のイギリス帝国がどのようにしてアジア国際秩序にかかわっていったのかを見ることによって、日本史・西洋史・東洋史という従来の縦割りの歴史を統合し、グローバルなリンクを描くことが試みられた。具体的には、イギリスが「パクス・ブリタニカ」の下で国際公共財を提供し、その中で、日本が「通商国家」としてアジアで台頭し、そして「アジア間貿易」が形成されていったことが紹介された。

1. グローバル・ヒストリーと国際政治経済秩序

グローバル・ヒストリーのキイ概念は、比較と関係性である。そして、これらを描きやすいのは経済史であるといえよう。以下では、一国史の枠組みを出る試みとして、近・現代のアジア国際政治経済秩序を扱う。その際、分析単位として、世界システム（世界経済）と広域の「地域」(region)を想定する。

2. 帝国とヘゲモニー国家

世紀転換期においてイギリスは、公式帝国をあわせ持ったヘゲモニー国家であった。つまり、オーストラリア、カナダ、ニュージーランドのような白人定住植民地と英領インド、英領マラヤ、香港などの従属植民地を持ち、一方で、地球的規模での圧倒的な経済力と軍事力そして文化的な影響力を持っていた。そして、自由貿易体制、国際金本位制、運輸通信網（海底電信網）などの国際公共財を提供し、国際秩序における「ゲームのルール」を形成していた。この意味で、世界的には「パクス・ブリタニカ」（イギリスの平和）が実現していたといえるだろう。

3. 世紀転換期のイギリス帝国

それでは、「パクス・ブリタニカ」はどのようにして可能になったのか。その要因をイギリスの経済構造の転換と軍事力の特徴に求めたい。

イギリスは「世界の工場」から「世界の銀行家・手形交換所・海運業者」へとその経済構造を転換した。これによりロンドン・シティは、国際金融の拠点となり、国際金本位制や自由貿易体制を支えることになった。また、ロイター通信社と海底電信ケーブルによる「情報革命」を通して情報が集中する場所となった。さらに、ポンド資金の世界循環システムつまり「多角的決済機構」を成立させた。

イギリスの軍事力にとって、王立海軍とインド軍の存在が重要であった。王立海軍は、海軍基地の確保と「エンパイア・ルート」の防衛とを任務として、砲艦

外交の立役者となった。一方、インド軍は、その兵力は約14万人であり、インド財政で維持されていたが、本国議会の統制を受けていなかった。そのためイギリスは、インド軍を自由に非ヨーロッパ世界に派兵することができた。実際、アヘン戦争、アフガン戦争、エジプト、マルタ、南アフリカなどに派兵した。

このような経済・軍事的背景に支えられて、イギリスは覇権国家として世界に登場したのだった。

4. イギリス帝国とアジア国際秩序

世紀転換期の日本は、覇権国家イギリスの「ジュニア・パートナー」であったといえるだろう。日本は1等国としてのグローバル・スタンダードに達するために1897年に金本位制を導入した。そして、日清戦争で得た清朝からの賠償金をイングランド銀行に預けて運用した。また、1902年に日本はイギリスと同盟関係を結ぶが、日英同盟は日本にとって、イギリス製の最新鋭軍艦を輸入して海軍力拡張を可能にするものであった。これに加えて、日本がロンドン・シティにおいて日露戦争のために戦費調達することに役立った。さらに、日本は「通商国家」として台頭する際にもイギリス帝国の恩恵に与った。日本はイギリスから繊維機械（資本財）を輸入し、英領インドから安価な綿花を輸入できた。

一方、19世紀末から20世紀前半の「アジア間貿易」は、「パクス・ブリタニカ」の下で形成され発展していった。「アジア間貿易」は、英領インド、東南アジア、中国、日本の4つの地域を結ぶ貿易であり、高い成長率を示した。その原動力となったのは「綿業基軸体制」であった。インドの綿花がボンベイと大阪・神戸の近代綿糸紡績業の勃興を促し、インドと日本が中国へ綿糸を輸出する構造が出来上がった。そして、インドと日本の紡績業における工業化を支援していたのがイギリスであった。マンチェスターからロンドン・シティへ経済の中心が移っていたイギリスは、工業化に邁進するインドと日本を資本投資先とみなしていた。特に、英領インドの工業化によって生じる貿易黒字が本国費としてイギリスに流れてくることを重視した。これらの結果、中国市場でのインド、日本、中国産綿糸の競争が「アジア間貿易」では起こった。

5. おわりに

以上見てきたアジアとイギリスの相互依存関係は、1930年代まで続いていたといえる。最後に、今回の講義とグローバル・ヒストリーについて考えてみたい。イギリス帝国がアジア国際秩序にどのようにかかわっ

ていたのかを見ることによって、日本の工業化、ロンドン・シティの繁栄、イギリス帝国史、アジア間貿易を、バラバラなものではなく、モノ・ヒト・カネ・情報の流れの中で関連付けて見ることができるだろう。そしてこのように見ることは、これからの東アジアの経済発展を考える上でも参照になりえるだろう。

質疑応答

Q: イギリス帝国のインフラは現在でも残っているか。

A: 残っている。特に、金融サービスの点で顕著である。そして実際、現在のイギリス経済は、シティの金融サービス (invisible transactions) によって支えられている。

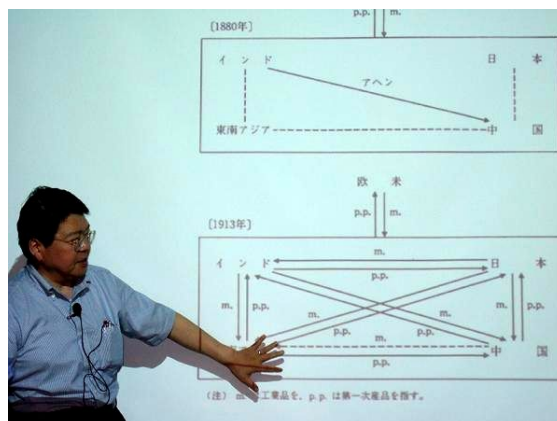
Q: 経済構造において、イギリスは金融に向かい、英領インドは工業化に向かった。この差はどこで生まれたのか。

A: イングランド銀行が果たしている役割、人的資源、

サービスの多様さ、資金などが重要だと思われる。

Q: 現代のアメリカは非公式帝国か。

A: そのように呼べないだろう。なぜなら、アメリカは内政にまで影響を与えているとは言えないと思うからである。 (文責: 畑中)



授業アンケートから

世界システムという西洋中心史観といったネガティブなイメージが先行しがちですが、そこにポジティブな相互補完関係を見出すというのが、新しい積極的な枠組みとして非常に印象的でした。また、例えばローマ帝国、モンゴル帝国、そしてオスマン帝国などといった過去の帝国についても、相互補完性のようなものが周辺地域との間であったのかという研究も（既にあるのかもしれませんが）興味深いところだと思いました。(1年・文I)

高校までも日露戦争周辺の日英関係や貿易構造の変化についてある程度学んできたが、それらはすべて“日本の”歴史を中心に据えたうえで、あくまでも副次的な情報として日本とイギリスの経済関係を見たものだった。その意味において今回の講義は、二国間の連関性を中央においた上で当時の状況を眺めるという新しい視点、つまり“グローバルな”視点をういており、同じ歴史を以前学んだことがあるにもかかわらず新鮮であった。(1年・文I)

イギリスの覇権維持はアジア間貿易の発展に依存していたということだが、自国の利益のためにアジアを利用したとみなせなくもないが、他国の上に乗っかっていることを不安定に思わなかったのだろうか。また、利益を得たいイギリスと近代化を急ぎたい日本を結びつける糸が綿糸というのは、しゃれではないが興味深い。近代のアジアとヨーロッパで垂直的分業と相互依存関係があったのも興味深い。(1年・文I)

グローバル・ヒストリーは、世界が非常に狭くなりつつある現代においてのみならず、はるか以前から経済活動を通じて国と国とを緊密に結付けていたことがよく理解できた。それぞれの国が思惑を持って外に向かおうと意図し、それが世界システムに合致し、その中に組み込まれていくときに、様々な事象が連動して歴史が動いていく様子はとても興味深い。イギリスがいち早く工業重視社会を脱し金融社会へと移行していくのは、現在社会の象徴に思える。(2年・文III)

英国のインド植民地支配、ロンドン・シティの経済的繁栄、そして日本の急速な工業化という世界の3つの場所で起こった出来事は、実はモノ・カネ・ヒトの移動によって密接に結びついており、ひとつの国際システムを構築しているというグローバリゼーションの具体的な事例を知ることができた。ところで、覇権国家の存在は、国際秩序におけるルールの形成を促すという面では不可欠な存在であるのかもしれないが、それは逆に価値観を他国に押し付けることにつながるという危険な側面もはらんでいると思った。また、現在の覇権国家であるアメリカの地位が将来失われたとき、アメリカに変わる覇権国家は登場しうなのか、あるいは覇権国家の存在しない新たな国際体制が生まれるのか関心を持った。(1年・文III)

グローバル・ヒストリーと帝国論：リレー講義のまとめを兼ねて

木畑 洋一

第13回：7月17日（火）

講義内容

1. イントロダクション

「グローバル・ヒストリーの挑戦」は、非常に多面的な試みであった。歴史学者はもちろん、理系の研究者からのアプローチもあった。それは、巨大な東京大学において、誰が何をしているかわからないなか、グローバル・ヒストリーを媒介に学問を俯瞰する試みだ。そこでは、多様な時間的スケール・空間的スケールが考察の対象となった。前者では「人間社会」を500万年レベルに拡大してみることもあったし、後者ではヨーロッパ中心史観への「挑戦」、すなわちアジア重視の講義が目立った。

2. グローバル・ヒストリーとは

「グローバル・ヒストリー」とはなにか。各先生は各自のグローバル・ヒストリーを語ってきたように思える。従来からの概念として「世界史」がある。両者の関係性にも様々な考えがあったが、木畑先生は同じものととらえる。対抗概念はナショナル・ヒストリーだ。これは、19-20世紀の国民国家がアイデンティティの基盤となっていたことを想起すればよい。しかし、国民国家は長い歴史をもつ概念ではない。それでいて、私たちは「中世の“イギリス”は…」などと、国民国家を過去にもあったと想定して語る傾向がある。こう考えると、国民国家を基盤とした歴史解釈は揺らいでくる。

「世界史」はときに国民国家史の寄せ集めと揶揄される。だが、木畑先生はこの概念内でも十分にグローバル・ヒストリーの発想は可能と考える。たとえば、上原専祿『日本国民の世界史』（1960年）は文明圏間の相互作用に注目して歴史を描こうとした。一方で、「世界」の別のとらえかたも本講義では提出された。ポメラッツ先生はWorld HistoryをGlobal Historyの上位に置き、羽田先生は「世界」が「イスラーム世界」のように、限定的な概念定義にいたる可能性を指摘している。

グローバル・ヒストリー流行の背景にグローバル化があることは事実だし、社会的要請としてグローバル化に対応する歴史的視座が求められていることも間違いない。だが、グローバル・ヒストリーは即「グローバル化の歴史」ではない。むしろ木畑先生は、グローバル・ヒストリー概念によって、従来の世界史ではできなかった諸問題へのアプローチが可能になる、という立場をとっている。

3. グローバル・ヒストリーと帝国、「帝国論」の現在

ここでは、グローバル・ヒストリーと帝国を同時に考察しうる理由を考える。A.G. ホブキンスはグローバル化を “Archaic”、“Proto”、“Modern”、“Post-Colonial”の歴史的4段階に分類した。第一段階（前近代・中世帝国）と第二段階（近世。国民国家準備段階の国家再編期）には疑問があるが、近代帝国と帝国主義が問題となる19世紀以降の第三段階には、現在のグローバル化の考察に資するものがある。そもそも、秋田先生が「イギリス帝国はグローバル・ヒストリーを考えるうえで良いブリッジとなる」と述べるように、帝国を考えることで、国民国家の枠を相対化することができよう。ただし、帝国論が常時グローバル・ヒストリーに連結するとは限らない（山下先生の「世界システム論」や、羽田先生の論じる「世界」「地域」のからくりを想起すればよい）。

戦後から70年代にかけて、帝国論は現実世界との関連性が薄いと判断されていた。だが、サイード『オリエンタリズム』に代表されるポストコロニアリズムや、ソ連の崩壊によって帝国論が再び脚光を浴びだした。さらに、「9.11」以降の「アメリカ帝国」論が、アメリカを帝国と認定する、しないの別を含めても、帝国論を活性化していることは間違いない。

4. 「帝国」と「世界帝国」

「帝国」の理解は多様だ。木畑先生は、「空間的広がり」と拡大志向、「文化的ダイナミクスを内包」そして「構成部分は中心と他に色分けされ、支配関係がある」と定義している。ここで、帝国理解のために有効な概念をふたつ紹介すると、第一に「ヘゲモニー」、第二に「公式帝国・非公式帝国」がある。W. ドイルによると「帝国において、中心は、支配される政治体の内政・外政双方に政治的コントロールをおこなう」いっぽう、「ヘゲモニー関係においては、ヘゲモニーを握る政治体は相手方の政治体の外政をコントロールするが、内政へのそれは限られる」という。公式帝国と非公式帝国に関しては、イギリスとアルゼンチン、あるいは中華帝国版図のグラデーションの特徴を考えればよい。

ところで、世界史教科書には「帝国」が度々登場している。しかし、多くはユーラシア大陸を支配したのみだから、大英帝国が初の「七つの海」を支配する帝国（＝「世界帝国」）といえよう。ここに、大英帝国史とグローバル・ヒストリーの親和性がある。19世紀後半

の帝国主義世界体制は、イギリスを最大の帝国に戴きつつ多くの帝国が世界を分割していった。重要なのは、この時代において、帝国支配にともなうヒト・モノ・カネ・情報の規模・速度が帝国主義の下で飛躍的に増大したことである。

5. 現代世界と帝国論の適用

「アメリカ帝国」の台頭と前後して、新たな「帝国」概念も提出された。A. ネグリと M. ハートの『帝国 (Empire)』では、帝国を「中心なき、脱領域的支配装置」とする。現在の世界状況をかなり説明するこの理解は有効性があるが、なお歴史的な帝国概念からは乖離しており、木畑先生は強い疑念を抱いている。

アメリカについて「非公式帝国」概念を適用することにも木畑先生は慎重である。なぜならば、帝國的なふるまいをアメリカは試みているが、帝国の「中心」たる支配を外部に貫徹する力を欠いているからだ。アメリカが「グローバル化時代のヘゲモニー国家」だと木畑先生が形容するゆえんでもある。

質疑応答

Q：グローバル・ヒストリーでは「比較と関係」がキーワードだったと思う。「関係」とはなにか？

A：マルクス主義での「(生産)関係」といった意味ではない。かつて日本では「世界史発展の法則」から

抽出される「発展段階」のずれを「比較」する意味で「比較経済史」が盛んだったが、各地域間等の関係性は捨象されていたきらいがある。グローバル化で関係性が密になるのは事実だ。「比較」と「関係」のバランスが必要だ。

Q：ある事象が帝国かヘゲモニー関係にあるのか、どのように線引きするのか。

A：現実的には困難な作業だ。アメリカと現在のイラクの関係ひとつをとってもそうだし、非公式帝国全般にいえる課題である。各論者が、状況に応じて判断しているのが現状だ。

Q：日本の「世界史」教科書は、世界を網羅的に記述している珍しい例だという。すると、上原専禄のような思考はどこから生まれたものだろうか。バンドン会議(1955年)との関連はあるのか。

A：当時の歴史家の多くは世界史の基本法則や発展段階説を考えていた。だが、上原のように、世界の中で民族その他を考察するとき、基本法則あるいはナショナル・ヒストリー的理解では立ちゆかないことを感じた人がいる。そこにバンドン会議開催が影響しているのもたしかだ。ただし、この関心が日本の高度経済成長の過程で薄れたことも事実だ。

(文責：浦田)

授業アンケートから

歴史記述の際、やはり区切りがあると易しい。だから、従来の歴史学が細かく分かれていたのは納得できることだ。講義を受けていると、グローバル・ヒストリーの難しさは、その区切りを取り去る試みだからだと思った。(1年・文I)

全講義を通してみると、感慨にふけてしまった。世界のとらえかたは型にとらわれがちだが、自ら関係を見出し、いくらでも記述法が変えうるという柔軟性を、本講義で身につけた。かねがね興味のあったモンゴル帝国を、グローバル・ヒストリーを意識して学ぶのが楽しみだ。(1年・理I)

本講義の特色に、歴史学・人文科学と自然科学の対話があった。グローバル・ヒストリーを歴史学の新分野としてではなく、各々の学問分野のディシプリンの上に立つ、まさに「学際的」研究領域と捉えてよいのだろうか。とても興味深く感じられる。(他大学からの聴講生)

「ナショナル・ヒストリーとグローバル・ヒストリーを区別すべきだ」と感じていたが、次第に「重複する部分を考え、世界史は両方を包括的に論じられないか」と考えるようになった。人類の道程のなかでそれぞれの学問は生まれてきたのだから、歴史のとらえ方が包括的になるのは、ある意味で当然かもしれない。(1年・文I)

それでも、ヨーロッパ中心史観は高校世界史に残っていくと感じた。ギリシア・ローマの民主政とその崩壊を考えることで、現代日本の民主主義を理解するのに役立つように。しかし、世界史をニュートラルに考えたい思いは僕も同じだ。自分の学問分野とは土俵違いかもしれないが、「グローバル・ヒストリー」への視座を持ち続けたいと思う。(1年・文III)

学問というもの是一般化しすぎると、「常識」や「同語反復」化して意味を失い、しかし個別の事象に特化しすぎると学問的には何も得られなくなる、ということで個人的に悩んでいた。グローバル・ヒストリーを考えることは、ナショナル・ヒストリーに比べれば一般的でありつつ、扱うテーマはとても特化している。その関連性が興味深かった。(1年・文I)

目次 (韓国朝鮮語・ベトナム語)

2007 년도 여름학기 EALAI /ASNET 테마 강의 : 글로벌 히스토리의 도전

1. 미즈시마 츠카사 (도쿄대학), 글로벌 히스토리의 도전	8
2. 코마츠 히사오 (도쿄대학), 이브라힘의 여행 : 러시아·오스만제국·일본	10
3. 하네다 마사시(도쿄대학), 이슬람 세계의 창조와 새로운 세계사	12
4. 쿠로다 아키노부 (도쿄대학), 화폐가 말하는 세계사	14
5. Ken Pomerantz (캘리포니아대학), <i>What Can history Offer To Global Studies?</i>	16
6. 시마다 류토 (세이난가쿠인대학), 근대 아시아의 무역과 영국의 산업혁명	20
7. 야마시타 노리히사 (리츠메이칸대학), 세계체제론에서 글로벌 히스토리로	22
8. 키도코로 테츠오(도쿄대학), 아시아의 도시는 근대도시계획을 어떻게 받아들였나	24
9. 스가이 토시히코 (도쿄대학), 변동하는 아시아의 자연환경과 — 그 현재·과거·미래	28
10. 카와시마 히로유키(도쿄대학), 생물자원과 인류의 100년, 1950~2050	30
11. 마츠모토 료우 (도쿄대학), 호수의 퇴적물에서 중국의 역사를 읽는다 : 지질학자의 눈	32
12. 아키타 시게루 (오사카 대학), 아시아의 국제질서와 대영제국, 헤게모니	34
13. 키바타 요우이치 (도쿄대학), 글로벌·히스토리와 제국론	36

Học Kỳ I Năm Học 2007 Bài Giảng Chuyên Đề EALAI/ASNET NHỮNG THÁCH THỨC CỦA LỊCH SỬ TOÀN CẦU

1. Mizushima Tsukasa (Đại học Tokyo),	8
	<i>"Những thách thức của lịch sử toàn cầu"</i>
2. Komatsu Hisao (Đại học Tokyo),	10
	<i>"Chuyến du hành của Ibrahim: Nga, Đế quốc Ottoman, Nhật Bản"</i>
3. Haneda Masashi (Đại học Tokyo),	12
	<i>"Sự tạo thành thế giới Hồi giáo và Lịch sử thế giới mới"</i>
4. Kuroda Akinobu (Đại học Tokyo),	14
	<i>"Lịch sử thế giới qua câu chuyện tiền tệ"</i>
5. Ken Pomerantz (Đại học California),	16
	<i>"Lịch sử có thể giúp gì cho nghiên cứu toàn cầu?"</i>
6. Shimada Ryuto (Đại học Seinan Gakuin),	20
	<i>"Ngoại thương ở châu Á thời cận thế và Cách mạng công nghiệp Anh"</i>
7. Yamashita Norihisa (Đại học Ritsumeikan),	22
	<i>"Từ lý luận hệ thống thế giới đến lịch sử toàn cầu"</i>
8. Kidokoro Tetsuo (Đại học Tokyo),	24
	<i>"Đô thị châu Á tiếp nhận kế hoạch đô thị cận đại như thế nào?"</i>
9. Sugai Toshihiko (Đại học Tokyo),	28
	<i>"Môi trường tự nhiên của một châu Á biến động – Hiện tại, quá khứ và tương lai"</i>
10. Kawashima Hiroyuki (Đại học Tokyo),	30
	<i>"Tài nguyên sinh vật và 100 năm nhân loại (1950~2050)"</i>
11. Matsumoto Ryo (Đại học Tokyo),	32
	<i>"Đọc lịch sử các triều đại Trung Quốc từ những vật trầm tích dưới lòng hồ: Lịch sử dưới con mắt của nhà địa chất"</i>
12. Akita Shigeru (Đại học Osaka),	34
	<i>"Trật tự quốc tế ở châu Á và đế quốc Anh, quyền lãnh đạo"</i>
13. Kibata Yoichi (Đại học Tokyo),	36
	<i>"Lịch sử toàn cầu và đế quốc luận"</i>

RA・TAのページ

卑近な話だが、出身高校の先生にこの連続講義を「東大世界史入試(大論述)の意図がわかる授業」と紹介したことがある。各講義では断片的に知っている事実に出会ったが、「グローバル・ヒストリー」を鍵に、その知を連続化したことこそ、本講義の最大の魅力に感じた。個人的にはぜひ高校生時代に受けたかった講義であり、ようやく僕が受験した世界史論述の出題意図もわかったものである。そのような知にTAとして触れられたことは望外の幸福だったし、ひるがえって、この講義をつくりあげてくれた先生や事務の方々、RA・TA、そして受講生のみなさまに感謝です。

(TA・浦田 瑛介)

全13回の講義を通して、グローバル・ヒストリーとは何か、そしてどのような挑戦をしているのかがある程度明らかになったと思う。個人的には、歴史学も科学的進歩をしているのだと思った。例えば、政治学におけるパワー概念は、自然科学に倣うようにして実体概念から関係概念へと発展していった。これとほぼ同じように、グローバル・ヒストリーは、何らかの実態の解明を目指す歴史学(つまり一国的な歴史学)から、人・モノ・カネ・情報・思想・文化の関係性を扱う歴史学へと発展しようとしているのだろう。このように政治学と比べられることを快く思わない人もいると思うが、関係性と同様に比較をキイ概念とするグローバル・ヒストリーという文脈では許してもらえらるだろう。最後に、講義要旨が遅れ気味な私を温かく見守ってくれたRAの澁谷さん、他のEALAIスタッフの皆さん、そして今回のテーマ講義のTAという知的興奮に満ちた仕事を紹介して下さった水島先生・木畑先生に感謝いたします。

(TA・畑中 弘人)

今回の一連の講義は、グローバリゼーションの過程それ自体の解明を目的とする方法(世界システム、帝国論、交易)、異なる地域を越えて存在する共通要素を切り口とする方法(人物への着目、貨幣、交易、帝国論、自然環境)の2つに分けられるように感じた。東洋史出身で地域研究も行っている者として、グローバル・ヒストリーと自らの研究をどう関係付けたらよいのかを考えてみた。前者は、グローバル化の進む現在、とくに研究結果の解釈・発信(世界史教育など)の面で必須の方法であるのではと感じた。後者に関しては、今回の講義で扱われたような、グローバル・ヒストリーと馴染み易い、いくつかの切り口(人物への着目、貨幣、交易、自然環境など)というものが存在することが明らかになったと思う。しかし、一方で、史料を読み史実を描き出す作業を考えると、1人で読むことのできる史料には限界があるため、特定の空間枠における特定の時間枠の変化を追うことに留まりがちになるし、空間や時間を限定したミクロな範囲を扱うからこそ、その範囲内の全体像をより豊かに描き出せる、とも考えられる。グローバル・ヒストリーの挑戦とは、現在の世界のあり方と過去のグローバリゼーションをいかに関連付けるかという挑戦、有効な切り口をどれだけ開拓できるかという挑戦、個別の研究者の提示したミクロな歴史像をどう解釈し繋ぎ合わせるかという挑戦に他ならないのではないかと思う。

最後に、すばらしい講義を用意して下さった講師の先生方、RAの仕事を紹介して下さった木畑先生・水島先生、活発な質問を出して下さった受講生の皆さん、石井先生ほかEALAI関係者の皆さんにお礼申し上げます。

(RA・澁谷 由紀)

協力者一覧

(五十音順)

■担当教員 Professors in Charge

木畑 洋一 KIBATA Yoichi

水島 司 MIZUSHIMA Tsukasa

■EALAI 特任助教 EALAI Research Associate

石井 弓 ISHII Yumi

■EALAI 研究員 EALAI Researcher

木村 理子 KIMURA Ayako

■テーマ講義 RA Research Assistant

澁谷 由紀 SHIBUYA Yuki

■テーマ講義 TA Teaching Assistants

浦田 瑛介 URATA Yosuke

畑中 弘人 HATANAKA Hiroto

■報告書編集 Editors

浦田 瑛介 URATA Yosuke

畑中 弘人 HATANAKA Hiroto

澁谷 由紀 SHIBUYA Yuki

■英文翻訳 Translators

橋本 悟 HASHIMOTO Satoru

宗村 美里 MUNEMURA Misato

Stefan SAEBEL

■協力 Cooperation

浜口 一恵 HAMAGUCHI Kazue

2007年8月31日発行

東京大学

東アジア・リベラルアーツ・イニシアティヴ (EALAI)

03-5465-8835(TEL&FAX)

admin@ealai.c.u-tokyo.ac.jp

<http://www.ealai.c.u-tokyo.ac.jp/>